

徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 7

1997. 3

徳島市教育委員会

徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 7

1997. 3

徳島市教育委員会

序 文

万葉の時代から知られる清冽な吉野川の水と眉山の豊かな緑に恵まれた徳島市には、先人が残した悠久の歴史を証す文化遺産が数多く遺存しております。

都市開発事業の波はこれらの文化遺産にも大きな影響を与えていますが、発掘調査により明らかにされる数々の埋蔵文化財からは、かつて徳島の地に生活した先達の心を読み取ることができます。これらを学び受け継ぐことは、歴史・文化・自然を生かした創造性の高いまちづくりに通ずるものと思われます。

本市では、開発は文化財保護の両者を円滑に調和すべく発掘調査を実施しており、多大な成果を得ています。

本書は発掘調査の成果を一冊の報告書としてまとめたものですが、生涯学習および歴史教育、さらには学術研究の場に微力なりとも寄与することができれば、幸甚かと存じます。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり、多大な御理解と御協力を賜りました関係各位に深く感謝申し上げます。

平成9年3月31日

徳島市教育委員会

教育長 小林 實

例　　言

1 本書は平成5～7年度に徳島市内の埋蔵文化財包蔵地における諸開発事業に伴い実施した緊急発掘調査等の内、2遺跡2件についての概要報告書である。

2 報告の対象となった遺跡名、調査場所、調査期間、調査地については抄録に記載した。

3 発掘調査は徳島市教育委員会が主体となり、本書に係る経費は徳島市教育委員会が負担した。

4 出土遺物、図面、写真の整理等報告書作成に関する作業において、下記の方々の御協力を得た。記して感謝したい。

佐伯俊裕 高木 淳 市川欣也 倉佐晃次 中野勝美 山口文子 折野絵美

山本宗昭 青木健司 藤村友彦

5 本書に収録した遺物および記録類は、すべて徳島市教育委員会社会教育課において収蔵・保管する。

6 本書の作成には調査担当者が分担して執筆し、目次にその文責を明らかにした。なお編集は勝浦康守が行った。



調査地位図（国土地理院発行1/50,000「徳島」「川島」縮尺使用）

1 名東遺跡 2 常三島遺跡

目 次

序文

例言

目次

本文目次

I　名東遺跡（名東西都市下水路建設工事） (三宅良明) (1)

II　常三島遺跡（徳島大学工業会館建設工事） (勝浦康守) (15)

挿図図版

写真図版

挿図図版

I 名東遺跡（名東西都市下水路建設工事）

- 第1図 調査地位置図
第2図 検出遺構図（C区を除く）
第3図 堅穴住居跡SA02出土遺物
第4図 溝SD01出土遺物
第5図 溝SD04出土遺物
第6図 土壌SK01出土遺物
第7図 土壌SK02出土遺物
第8図 土壌SK03出土遺物
第9図 堅穴住居跡SA03 (40~51)
SA04 (52), SA05 (53~60)
SA06 (61~64), 出土遺物
第10図 溝SD05 (65, 66), 土壌SK05 (67
~69), SK06 (70, 71) 出土遺物
第11図 溝SD102 (72), 103 (73), 104 (74
~77) 出土遺物
第12図 土壌SK08出土土器
第13図 F区出土縄文時代晚期土器
- II 常三島遺跡（徳島大学工業会館建設工事）
- 第1図 調査地位置図
第2図 遺構配置図および堆積土層図
第3図 溝SD01~03遺物検出状況図
第4図 溝SD01出土遺物
第5図 溝SD01出土遺物
第6図 溝SD02出土遺物
第7図 溝SD02出土遺物
第8図 溝SD02出土遺物
第9図 溝SD02出土遺物
第10図 溝SD03 (1, 2), SD13(3)出土
遺物
第11図 溝SD12, 13遺物検出状況図
第12図 溝SD03 (4~6, 8~10), SD04
(12, 17), SD05 (13, 15), SD12
(7, 16, 18), SD13 (14) 出土
遺物
第13図 溝SD14出土遺物
第14図 土壌SK01遺物検出状況図
第15図 土壌SK01出土遺物

第16図 土壌SK01出土遺物

第17図 土壌SK02(1), SK03(2), SK04(3),
SK05 (4~14) 出土遺物

第18図 建物跡および小溝跡検出状況図

写真図版

I 名東遺跡（名東西都市下水路建設工事）

- 図版1 上：堅穴住居跡SA01, 02検出状
況
下：B区遺構検出状況
(部分調査時)
- 図版2 上：土壌SK01遺構出土状況
下：土壌SK02遺構出土状況
- 図版3 上：溝SD04遺物出土状況
下：土壌SK03確認状況
- 図版4 上：D区遺構検出状況
下：D区遺構検出状況
- 図版5 上：堅穴住居跡SA03検出状況
下：堅穴住居跡SA03甕 (40)
出土状況
- 図版6 上：堅穴住居跡SA03壺 (43), 鉢
(44, 46) 出土状況
下：堅穴住居跡SA03SP05断ち割
り状況
- 図版7 上：E区遺構検出状況
下：堅穴住居跡SA05 (E区) 検
出状況
- 図版8 上：堅穴住居跡SA05高杯 (60)
出土状況
下：E区遺構検出状況
- 図版9 上：土壌SK06, 07検出状況
下：溝SD102, 103検出状況
- 図版10 上：F区北半部溝SD105, 106檢
出状況
下：F区北半部溝SD105, 106檢
出状況
- 図版11 上：F区南半部溝SD105, 106檢
出状況
下：土壌SK08壺 (78) 検出状況

- 図版12 壓穴住居跡SA02出土遺物
- 図版13 溝SD01出土遺物
- 図版14 溝SD04出土遺物
- 図版15 土壌SK01出土遺物
- 図版16 土壌SK02出土遺物
- 図版17 土壌SK03出土遺物
- 図版18 壓穴住居跡SA03出土遺物
- 図版19 壓穴住居跡SA04 (52), SA05 (53, 59) 出土遺物
- 図版20 壓穴住居跡SA06出土遺物
- 図版21 溝SD05(65), 土壌SK05(70, 71), SK06 (67, 68) 出土遺物
- 図版22 溝SD102 (72), SD103 (73) SD104 (74~77) 出土遺物
- 図版23 土壌SK08 (78), 溝SD106 (79) 出土遺物
- II 常三島遺跡（徳島大学工業会館建設工事）**
- 図版 1 御山下島分縁図 常三島 個人蔵
- 図版 2 上：調査地堆積状況
下：噴砂現象
- 図版 3 調査地全景
- 図版 4 上：溝SD01~03遺物検出状況
下：溝SD01~03遺物検出状況
- 図版 5 上：溝SD01遺物検出状況
下：溝SD02遺物検出状況
- 図版 6 上：溝SD01遺物検出状況
下：溝SD01遺物検出状況
- 図版 7 上：溝SD02遺物検出状況
下：溝SD02遺物検出状況
- 図版 8 上：溝SD12, 13遺物検出状況
下：溝SD12遺物検出状況
- 図版 9 上：溝SD13遺物検出状況
下：溝SD13遺物検出状況
- 図版10 上：溝SD14遺物検出状況
下：溝SD14遺物検出状況
- 図版11 上：溝SD14遺物検出状況
下：溝SD14遺物検出状況
- 図版12 上：土壌SK01遺物検出状況
下：土壌SK01遺物検出状況
- 図版13 上：土壌SK05遺物検出状況
下：建物跡と小溝跡
- 図版14 上：石組遺構SX01
下：石組遺構SX01
- 図版15 上：石組遺構SX01
下：石組遺構SX01断ち割り状況
- 図版16 上：石組遺構SX01断ち割り状況
下：石組遺構SX01断ち割り状況
- 図版17 溝SD01出土遺物
- 図版18 溝SD01出土遺物
- 図版19 溝SD02出土遺物
- 図版20 溝SD02出土遺物
- 図版21 溝SD02出土遺物
- 図版22 溝SD02出土遺物
- 図版23 溝SD02出土遺物
- 図版24 溝SD02出土遺物
- 図版25 溝SD02出土遺物
- 図版26 溝SD02出土遺物
- 図版27 溝SD02出土遺物
- 図版28 溝SD03出土遺物
- 図版29 溝SD03 (4~6, 8~10), SD04 (12), SD05 (13), SD10 (11), SD12(7), SD13 (14) 出土遺物
- 図版30 溝SD04 (17), SD05 (15), SD12 (16, 18), SD14 (1~3) 出土遺物
- 図版31 溝SD14出土遺物
- 図版32 土壌SK01出土遺物
- 図版33 土壌SK01出土遺物
- 図版34 土壌SK02(1), SK03(2), SK04(3), SK05 (4~7) 出土遺物
- 図版35 土壌SK05出土遺物
- 図版36 溝SD01 (23), SD02 (56) 出土遺物
- 図版37 溝SD03 (19, 20), 土壌SK11 (18) 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	とくしまいそうぶんかさいはくちょうさがいよう						
書名	徳島市埋蔵文化財発掘調査概要						
副書名							
卷次	7						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	三宅良明・勝浦康守						
編集機関	徳島市教育委員会						
所在地	〒770 徳島市幸町2丁目5番地 TEL 0886-21-5418						
発行年月日	西暦 1997年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
みょうどう 名東	とくしまけんとくしまし 徳島県徳島市 みょうどうちょう	36201	- 34度 3分 35秒	- 134度 30分 20秒	1994017～ 19950531	400	下水道建設 工事に伴う 事前調査
じょうさんじま 常三島	とくしまけんとくしまし 徳島県徳島市 みなみじょうさんじまちょう	36201	- 34度 4分 33秒	- 134度 33分 53秒	19941201～ 19950131	500	徳島大学工業会 館建設工事に伴 う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
名東	集落跡	弥生	竪穴住居跡 溝 土壤	弥生土器 須恵器 黒色土器 管玉 紡錘車			
常三島	城下町跡	近世	建物跡 溝 土壤	陶磁器 瓦 木製品（下駄） 古銭			

I 名東遺跡（名東西都市下水路建設工事）

1 調査に至る経緯と経過

名東遺跡は鮎喰川水系の旧河川が形成した標高T.P.+7m前後の沖積微高地上に立地する、縄文時代晚期から江戸時代に至る複合遺跡として周知されている。

今回ここに概要を報告する調査は、平成5～7年度の名東町1, 2丁目における名東西都市下水路整備事業に伴い実施したものである。

調査は、周辺部におけるこれまでの調査成果を判断基準に、遺構の密な存在が当初より予測されたため、徳島市土木部建設課との合意により、下水路施工箇所の全面を発掘調査の対象として、平成6年1～3月、6月、10月、平成7年5月の工事掘削と併行して実施した。

2 調査成果の概要

調査は南北約165mの範囲で断続的に実施したため、ここでは各々の調査地を仮にA～F調査区と呼称する（第1図）。なお調査地には農業用水路が既存したため、これによる遺構面の削平が著しかった（第2図）。また工事用の矢板などにより、調査地全体の層序の把握が困難であったが、遺構は概ね標高T.P.+7.5m前後の黄褐色シルト層上面で検出された。

以下、各調査区における主な検出遺構と出土遺物について概要を述べる。

（1） A区の概要

約15m²の小範囲で、竪穴住居跡2棟（SA01, SA02）の一部を検出した（第2図、図版1）。

① 竪穴住居跡SA01

直径約6mの円形もしくは方円形の住居跡が想定される。壁溝と柱穴をとどめる。遺物は出土していない。

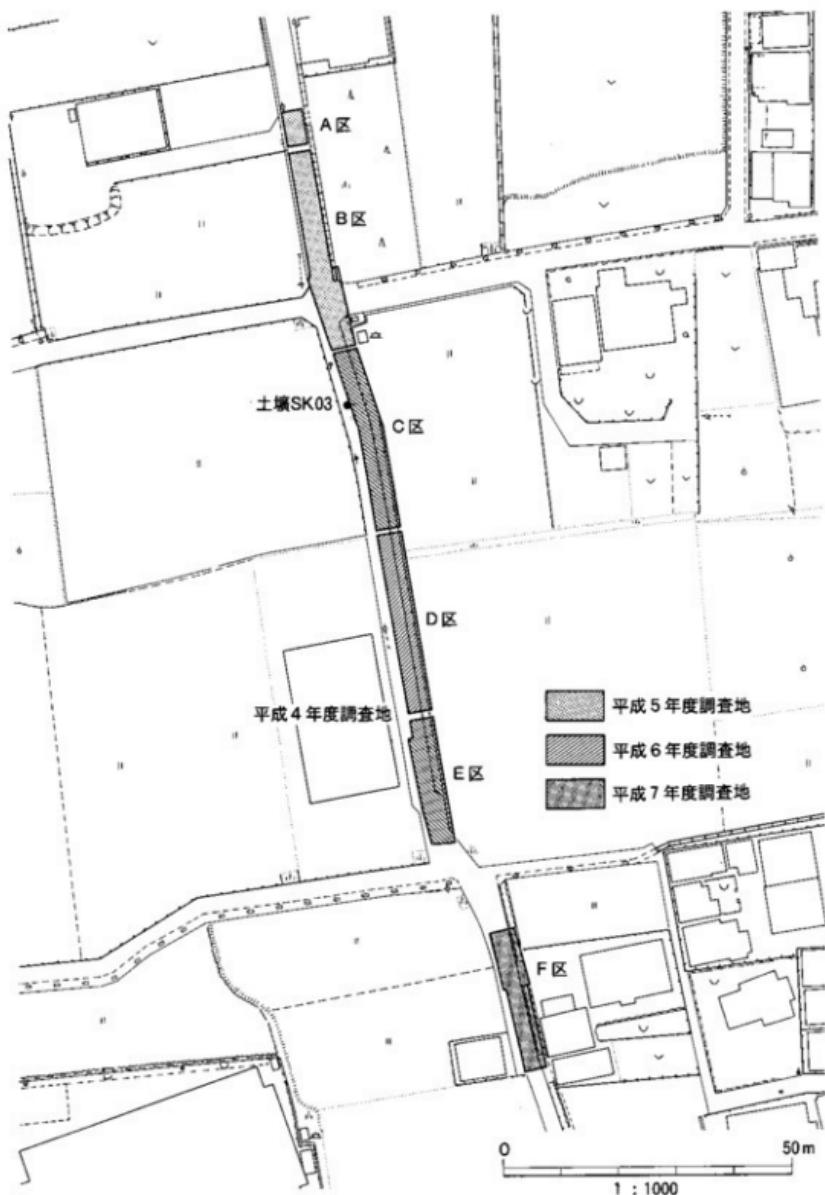
② 竪穴住居跡SA02

竪穴住居跡SA01に切られた状態で遺存する。壁溝は有しない。出土遺物は甕、壺の破片が僅かである（第3図、図版12）。

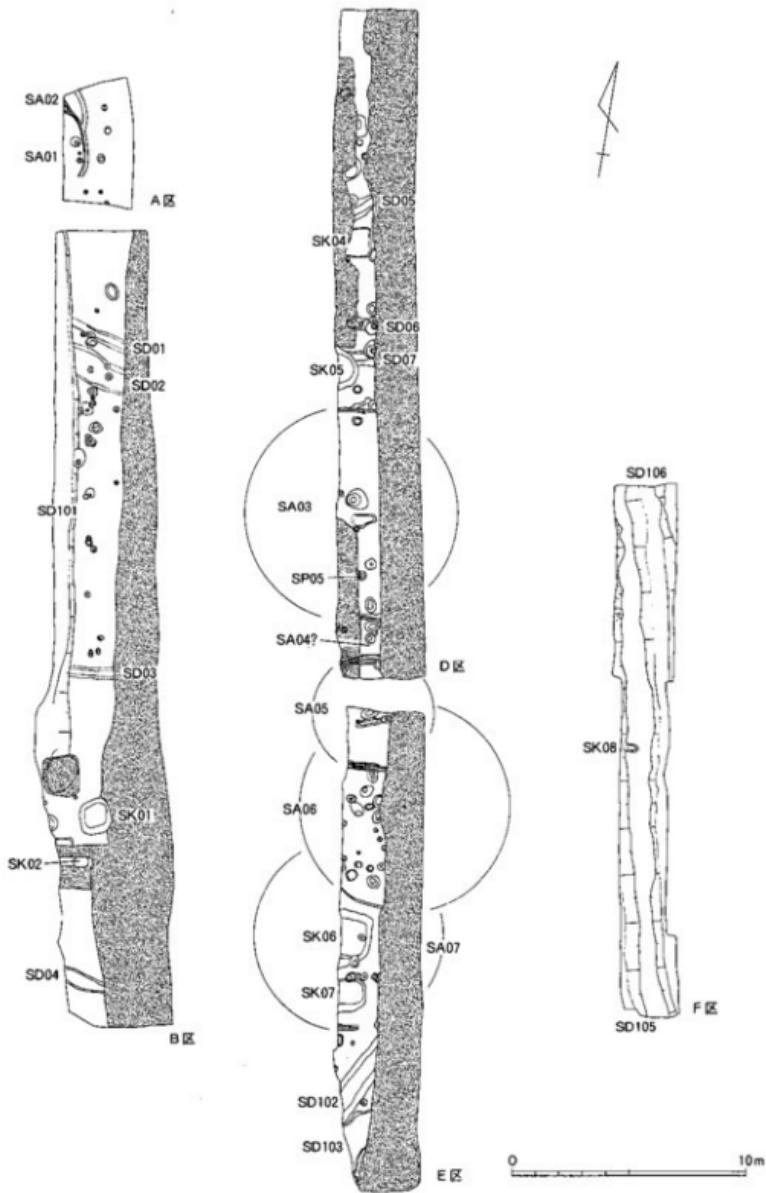
甕(1)は口縁部が「く」字状に屈曲し、端部を微妙に摘み上げる。内面には横方向のハケが施される。壺(3)は短頸壺で、口縁端部を上下に拡張させ、端面には3条の凹線が施される。体部外面には斜め方向のタタキ痕が残る。

（2） B区の概要

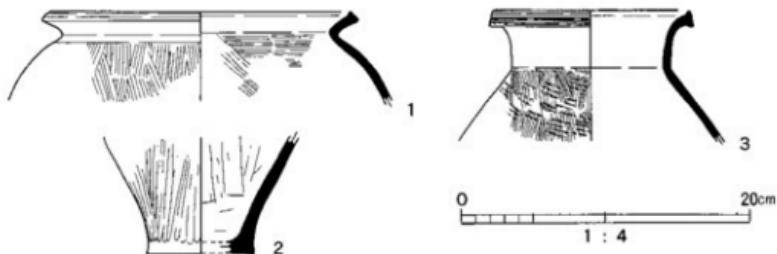
調査面積は約130m²である。検出遺構は南北方向の溝1条（SD101）、東西方向の溝4条（SD01～04）、土壙2基（SK01, 02）、ピットである。



第1図 調査地位置図



第2図 検出遺構図（C区を除く） 線かけ部分は水路等による擾乱範囲



第3図 積穴住居跡 S A 0 2 出土遺物

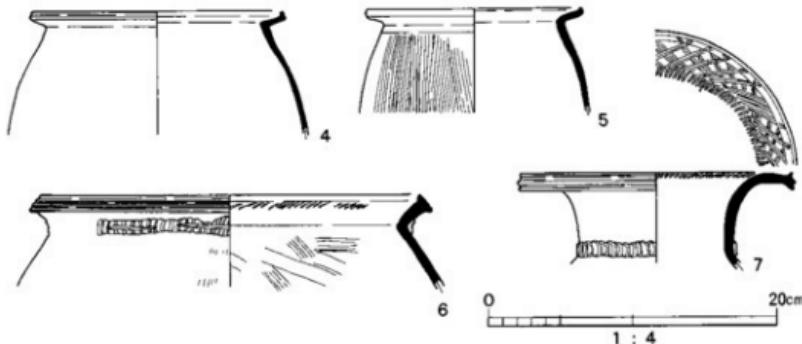
① 溝 S D 1 0 1

現存の水路と並行する南北方向の溝で、東半分を検出した。推定幅80cm～1m、深さ30cm前後を測る。遺物は出土していない。

② 溝 S D 0 1

東西方向の溝で幅40～50cm、深さ15～20cmを測る。出土遺物は、甕、壺がある（第4図、図版13）。

甕(4)は口縁端部を明瞭に挿み上げる。甕(5)の口縁端部は僅かな挿み上げで端面が丸みをもつ。甕(6)は口縁端部を上下に拡張し、端面には3条の凹線を巡らす。口縁屈曲部外面にはヘラによる1条の直線を引いた後、指頭圧痕を施した突帯を貼り付ける。口縁内面にはヘラ状工具による刺突文を施す。壺(7)は水平方向に大きく外反する口縁を有し、上下に拡張した口縁端面には2条の凹線を巡らし、口縁内面にはヘラによる斜格子文とその内側に刺突文を施す。頸部は指頭圧痕の貼付突帯で加飾する。



第4図 溝 S D 0 1 出土遺物

③ 溝 S D 0 2

溝SD01に並走する幅1.3m、深さ15cmの溝である。出土遺物なし。

④ 溝 S D 0 3

溝SD01、SD03、SD04とやや方向を異にする溝で、幅40cm、深さ15cmを測る。出土遺物なし。

⑤ 溝 S D 0 4

溝SD01、SD02と同一方向の溝で、幅50~70cm、深さ20cmを測る。土器の検出量は他の溝に比して多く、甕（8~14）、壺（15~17）が出土している（第5図、図版14）。

甕はいずれも胴長で、口縁部の屈曲も比較的緩やかで、端部にも明瞭な摘み上げは認められない。体部あるいは口縁部内面には斜位のハケが認められる。甕の底部（13、14）はやや上げ底状を呈する。壺（15、16）はいずれも体部から直立する口頸部を持つ短頸壺で、壺（15）は平坦な口縁端部をやや内側に拡張させている。体部下半部の外面はヘラミガキ、内面は縦位のヘラケズリにより調整されている。壺（16）の口縁端部は丸くおさめている。体部外面はハケである。壺（17）は、厚みのある球形の体部から口頸部がやや外反気味に延びる細頸壺である。頸部には断面三角形の貼付突帯を巡らし、その下部にヘラ状工具と竹管による刺突文を施す。体部下半はヘラミガキである。

⑥ 土壙 S K 0 1（図版2）

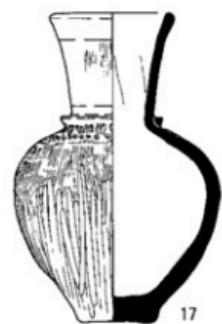
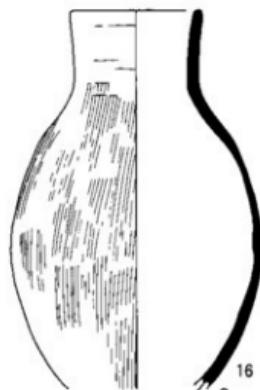
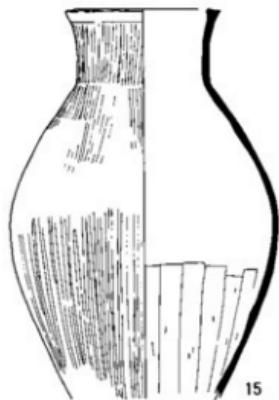
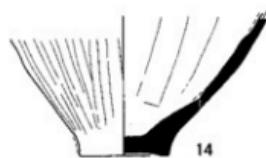
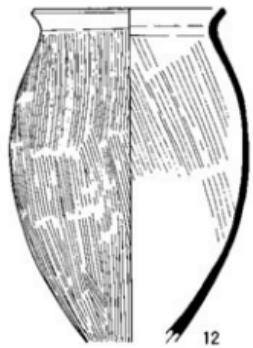
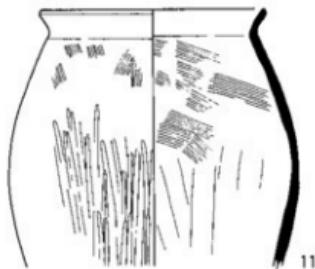
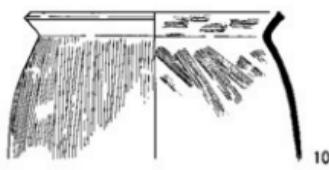
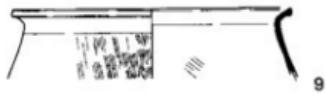
直径1.4mの方円形を呈し、深さ40cmを測る。壺（18、21）、甕（19、20）などが出土している（第6図、図版15）。

壺（18）は球形の体部を持ち、頸部に刺突文を施す。壺（21）は大型で口径26cmを測る。頸部には櫛描直線文を巡らせ、口縁部にかけては11条の断面三角形貼付突帯、およびその上に2本単位の棒状浮文を施している。また平坦に仕上げた口縁端面には、櫛描波状文と3個単位の円形浮文の剥落痕が認められる。

⑦ 土壙 S K 0 2（図版2）

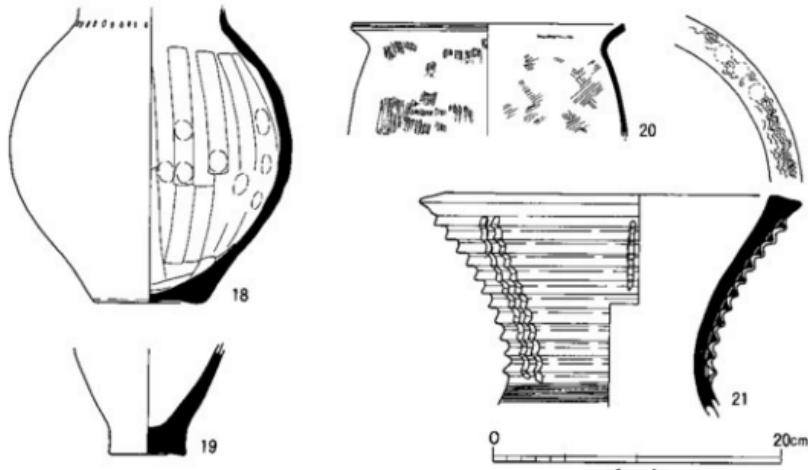
擾乱により遺構掘形の大半を欠くが、推定径70cm、深さ25cm前後の円形の土壙である。甕（22~25）、壺（26~31）などが出土している（第7図、図版16）。

甕（22）は口径30cmの大型品である。短く「く」字状に屈曲する口縁部下端には、1条の直線を巡らせた後、爪形圧痕文を施した突帯を貼り付ける。口縁端部は上下に拡張し、2条の凹線文を施す。甕（23~25）は、いずれも口縁端部を微かに摘み上げている。壺（29）は、頸部に指頭圧痕の貼付突帯文を2条施している。壺（30）は張りのある体部を持ち、口頸部が垂直に立ち上がる短頸壺である。口縁端部は平坦に仕上げる。壺（31）は算盤玉状の体部から口頸部が緩やかに外反していく広口壺である。体部最大径部には2条の櫛描波状文、体部上方から頸部にかけては5条+αの櫛描直線文を施す。体部内面はヘラケズリが顕著であり、外面下半はヘラミガキが施されている。体部には焼成後の穿孔が見られる。



0 20cm
1 : 4

第5図 濃SD04出土遺物



第6図 土壌SKO 1出土遺物

(3) C区の概要

本調査区では土壌1基とピット数基の存在を確認したのみである。

① 土壌SKO 3

水路法面掘削工事の段階で、壁面において幅70cm、深さ30cmの遺構断面を確認した(図版3)。壺(32, 33, 37), 壺(34~36), 鉢(38, 39)が出土している(第8図、図版17)。

壺(32)は球形の体部から口頸部が垂直に立ち上がった後、口縁部が緩やかに外反する。口縁端部は丸くおさめる。体部外面はヘラミガキ、内面はハケとヘラミガキを施す。壺(33)はやや細長の体部を持つ。外反する口縁部は上下に肥厚させ、端面はナデのみである。頸部には断面三角形貼付突帯文を施す。壺(35)は口縁端部に刻目文を施す。ヘラミガキは体部上端までおよぶ。

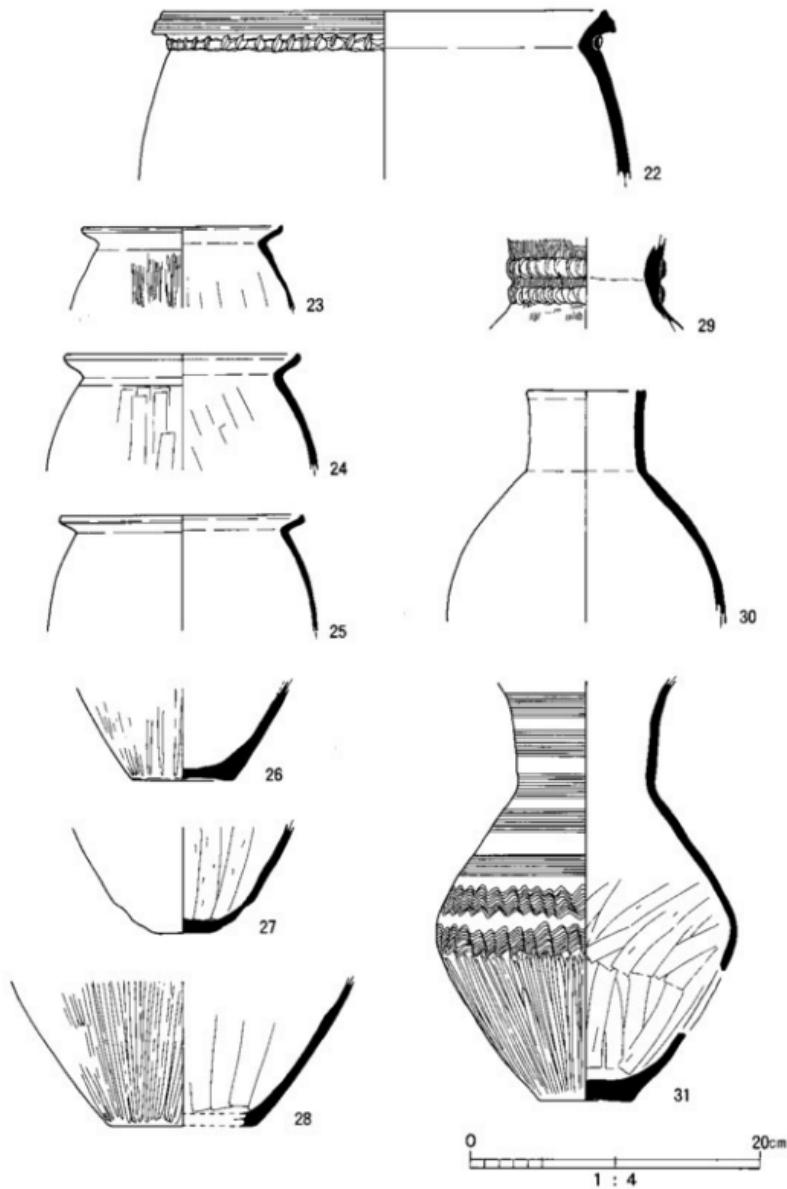
(4) D区, E区の概要

両調査区約145m²の60%が搅乱を受けていたが、遺構の密度は高く、竪穴住居跡5棟、土壌4基、溝5条、ピットが検出されている(図版4~8)。

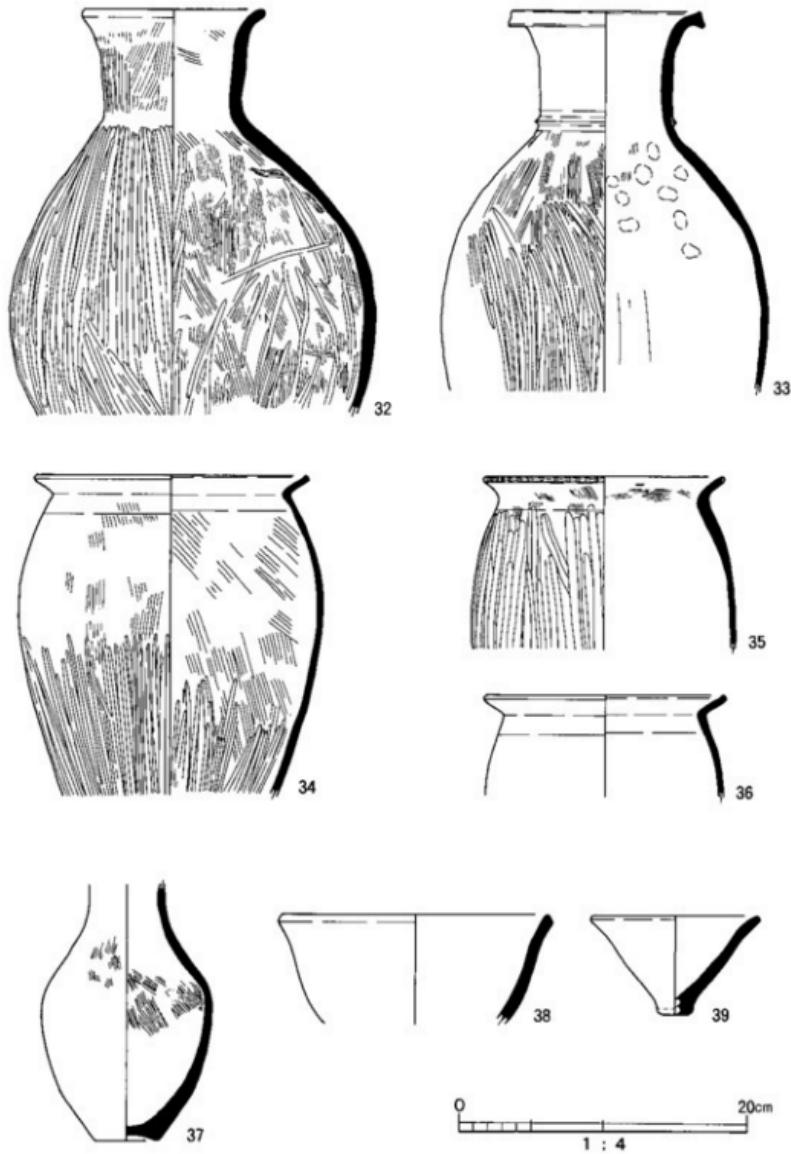
① 竪穴住居跡SAO 3

約20cmの壁高と幅約15cmの壁溝の一部が検出され、径約9mの円形住居跡と想定される。中心部には炉跡が存在し、柱穴SP05の底部には結晶片岩の根石が遺存する。壺(40~42, 49~51), 壺(43), 鉢(44~47), 高坏(48)などが出土している(第9図、図版18)。

壺(40)は球形の体部を持つ。口縁部は「く」字状に屈曲させ、やや肥厚させた端部には2条の擬凹線を巡らせる。体部外面はハケ調整のあと横方向のタタキを施す。内面は横→縦の順でヘラケズリが行われている。壺(42)の口縁端部は僅かに下方へ摘み出している。壺(43)は、垂



第7図 土壌SK02出土遺物



第8図 土壌SK 03出土遺物

直に立ち上がる頸部から口縁部が大きく水平方向へ外反し、端部は丸くおさめている。小型の鉢（44）は、口縁部にかけて先窄まり状に内湾する。中・大形の鉢（45～47）は、内湾気味に立ち上がる体部から口縁端部が僅かに外反する。

② 堅穴住居跡 S A 0 4

住居跡SA03とSA05の間に、床部がわずかに遺存すると思われるもので規模は不明である。甕の口縁部（52）1点が出土している（第9図、図版19）。

③ 堅穴住居跡 S A 0 5

D～E区にかけて検出された、径約5mの円形もしくは方円形の住居跡である。幅20cm、深さ10cmの壁溝を有する。中央部では炉跡が2基隣接して検出された。1基は1.1m×30cmの長楕円形で深さ20cm、もう1基は80cm×40cmの楕円形で深さ10cmを測る。いずれも炭化物と焼土の残存が顕著に見られる。このような長楕円形のものを含む炉の形態は、規模に差はあるが、平成4年に本調査区の隣接地でマンション建設に伴い実施された調査での検出例に類似する¹⁰⁾。

出土遺物には、甕（53～57）、高杯（58～60）がある（第9図、図版19）。甕（53、54）はいずれも口縁端部を大きく摘み上げ、端面には擬凹線を残す。高杯（60）は、やや肥厚する口縁部が垂直に立ち上がり、体部との境に凹線を1条巡らせる。体部外面ヘラミガキ、内面ハケである。

④ 堅穴住居跡 S A 0 6

推定径9mの円形住居跡で、壁溝は認められない。甕（61）、ミニチュア壺（62）、紡錘車（63）のほか、小型磨製石器（64）1点、石鏃4点、碧玉製管玉1点などが出土している。

小型磨製石器は頁岩の小礫を厚さ5mmの剥片に打割し、先端部を両刃に仕上げている。碧玉製管玉は折損しており長さ1cm、径3mmを測る。

⑤ 堅穴住居跡 S A 0 7

壁溝を僅かにとどめるのみで、推定径8mの円形住居跡が想定される。遺物は出土していない。

⑥ 溝 S D 0 5

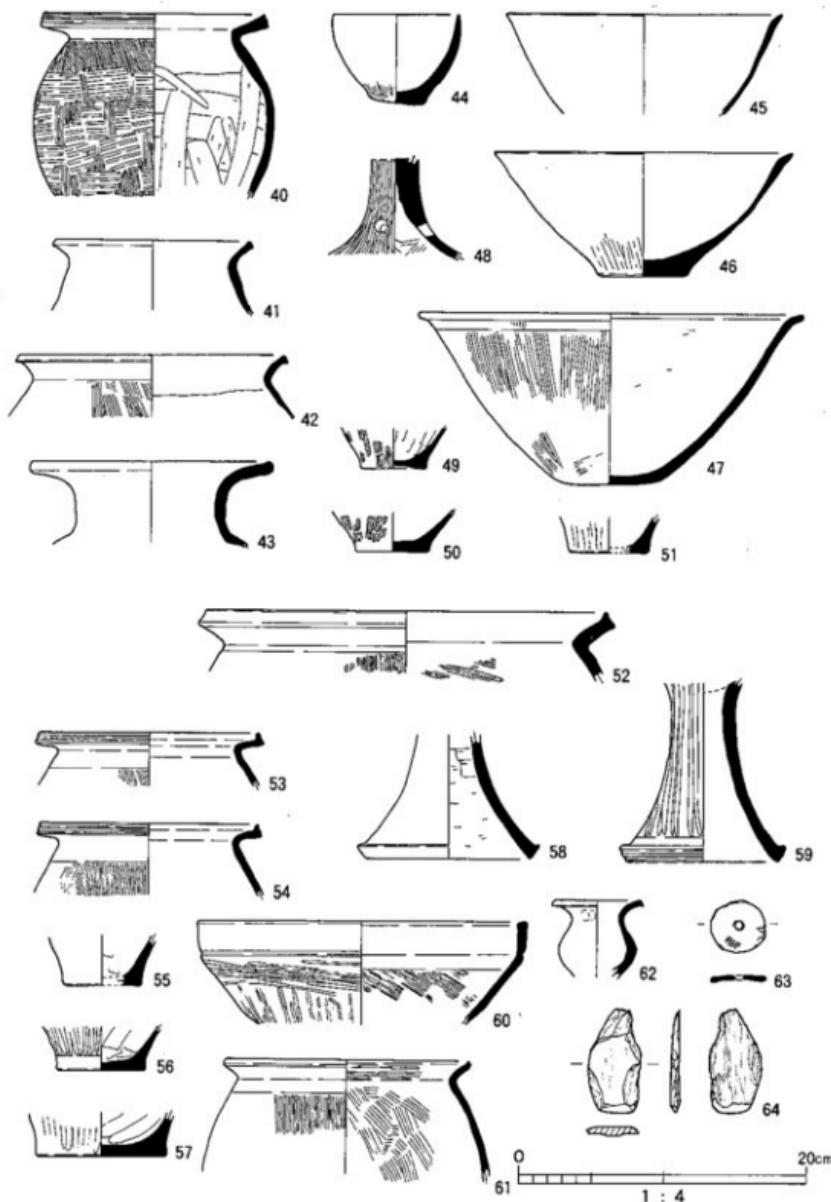
幅70cm、深さ20cmの北東～南西方向の溝。甕（65）、壺底部（66）が出土している（第10図、図版21）。甕（65）の口縁は叩き出しによる。

⑦ 溝 S D 0 6、0 7

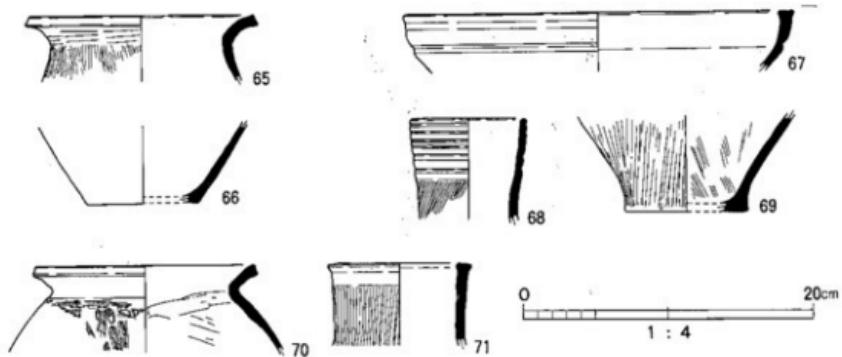
いずれも東西方向の溝で1mの間隔で並行する。SD06は幅50cm、深さ15cm、SD07は幅60cm、深さ25cmを測る。遺物は出土していない。

⑧ 土壙 S K 0 5

推定径2m、深さ60cmを測る。高杯（67）、壺（68）、甕（69）が出土している（第10図、図版21）。高杯（67）は口縁直下に1条の凹線を、僅かに肥厚する口縁端面には浅い2条の凹線を施す。壺（68）は細頸壺で、頸部上部から口縁部にかけて6条の凹線を施す。口縁端部は丸くおさめる。



第9図 積穴住居跡SA03(40~51), SA04(52), SA05(53~60), SA06(61~64)出土遺物



第10図 溝SD 05 (65, 66), 土壌SK 05 (67~69), SK 06 (70, 71) 出土遺物

⑨ 土壌SK 06

一辺約2mの方形状を呈し、深さ35cmを測る。甕(70)、壺(71)（第10図、図版21）と石鐵1点が出土している。甕(70)は「く」字状に屈曲する口縁端部を微かに肥厚させ方角状におさめる。体部内面はヘラケズリである。壺(71)は口頸部が垂直に立ち上がる短頸壺である。

⑩ 土壌SK 07

SK 06に隣接する。一辺約1.4mの方形状を呈し、深さ20cmを測る。遺物は出土していない。

⑪ 溝SD 102

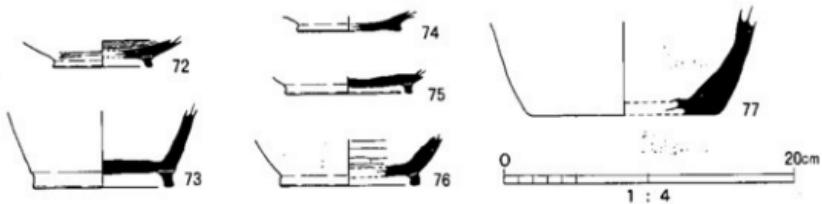
幅1.2m、深さ10cmの北東—南西方向の溝である。黒色土器の底部(72)1点が出土している。内外面とも黒色化したいわゆる「黒色土器B」に該当する（第11図、図版22）。

⑫ 溝SD 103

掘形ラインが不明瞭であるが、ほぼ北東—南西方向の溝が想定される。幅1.5~2m、深さ10cmを測る。須恵器(73)が1点出土している（第11図、図版22）。

⑬ 溝SD 104

SD102、SD103に切られるかたちで重複して検出された溝で、幅1mを測る。土師器壊(74)，須恵器壊(75, 76)，壺(77)が出土している（第11図、図版22）。



第11図 溝SD 102 (72), 103 (73), 104 (74~77) 出土遺物

(5) F区の概要

約55m²を対象に調査を実施し、土壌1基と溝2条を検出した。

① 土壌SK08

遺構の一端が溝SD105に切られる推定長径70cm、短径30cmの土壌で、遺物は広口壺(78)1個体のみが倒位の状態で出土している。削平により遺構、遺物とも下部が僅かに残るだけである(図版11)。

広口壺(78)は、頸部直下に断面三角形突帯を貼り付けた後、その上下面にヘラ状工具による刺突文を施す。突帯の下位には2条の梯描波状文を施す(第12図、図版23)。

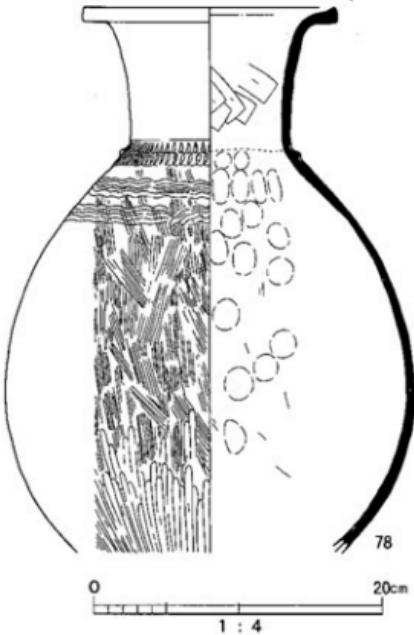
② 溝SD105

東側掘形が検出された北北西-南南東方向に延びる溝である(図版10)。南端部では底部が検出され、深さ70cm、推定幅1.2~1.3mを測る。土師器の破片が数点出土している。

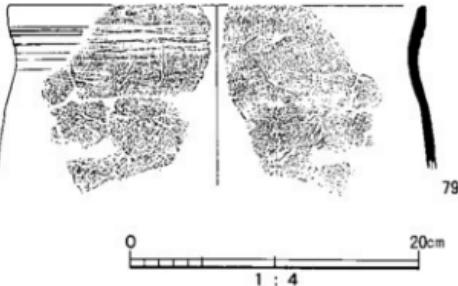
③ 溝SD106

溝SD105と同一方向に並走する幅1.7m、深さ70cmの断面U字状の溝である。埋土中層の暗灰褐色シルト層中に多量の礫と遺物の出土が見られる。遺物は擂鉢、土師器皿、三足釜の脚部などが出土しているが、弥生中期の高坏、甕、縄文晩期の深鉢(第13図)などが混在している。

深鉢(79)は、緩やかに外反する口頭部に二枚貝条痕を施し、胴部はヘラ削り調整であり、近畿地方の滋賀里III b式古段階に位置づけられるものであろう。三好郡三加茂町稻持遺跡のSR201-F10砂礫層一括資料などに類例が認められる。



第12図 土壌SK08出土土器



第13図 F区出土縄文時代晩期土器

3 小 結

今回の調査では各調査区とも既存水路等による削平、擾乱が著しく、遺構のごく一部を検出したにすぎないが、ある程度遺物が出土し時期を特定あるいは想定できる遺構は、堅穴住居跡SA01, 03, (04), 05, 07、溝SD01, 04, 05, 102, 103、土壙SK01～05, 07などである。

堅穴住居跡SA03はその出土土器に後期的な様相を示すものであり、SA01, (04), 05, 07ならびに溝SD01, 04, 05、土壙出土土器には、体部から口縁部にいたる加飾や調整技法に中期後半的な特徴が窺える。

住居跡の形態的特徴については不詳であるが、SA03, 06, 07は直径8～9mの規模が推定され、平成4年に隣接地の調査で検出された名東遺跡最大の直径10mの堅穴住居跡⁽¹⁾には及ばないが、それにはほぼ匹敵するだけの大規模な住居跡と言え、当該地（D, E区周辺域）が、弥生時代中期後半における名東遺跡の中核的集落の造営域であったことが窺える。

E区南端で検出された北東～南西方向に延びる溝SD102～104は、天理教国名大教会地区で検出されている同一方向の溝など⁽²⁾に関連するものとして捉えることも可能であり、奈良時代～平安時代（10世紀中葉）の間に機能した溝であろう。

B区の溝SD101およびF区の溝SD105, 106は、既存の用水路と並行して南北方向に延びる溝で、中～近世の灌漑用水路と考えられる。

F区は天理教国名大教会地区の東40mに位置するため、方形周溝墓の検出も期待されたが、今回の調査では検出に至らなかった。F区の調査面積の狭さと溝SD105, 106による遺構の削平を考慮すると、方形周溝墓の造営域がF区以西で途切れるのか、さらに東へ広がるのか判断は不可能であり、周辺部におけるより広範な面積での調査が待たれるところである。

またF区出土の縄文時代晩期の深鉢については、個体数の不足、出土状況の不安定さなどが指摘されるが、天理教国名大教会地区においては、自然落ち込み遺構SX01で（刻目）突帯を有する深鉢の一括資料の検出事例がある⁽⁴⁾。現段階においてはごく断片的な検出事例ではあるが、当該地域における縄文時代晩期中～後葉の様相を究明していくうえで、今後、周辺部での生活遺構の検出や一括資料の増加が期待される。

註

(1) 徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要3』1993年。

(2) (1)と同じ。

(3) 名東遺跡発掘調査委員会『名東遺跡発掘調査概要一名東町2丁目・宗教法人天理教国名大教会神殿建設工事に伴う発掘調査一』1990年。

(4) (3)と同じ。

(5) 湯浅利彦「徳島県三加茂町稲持遺跡」『第6回中四国縄文研究会』（レジュメ）1995年。

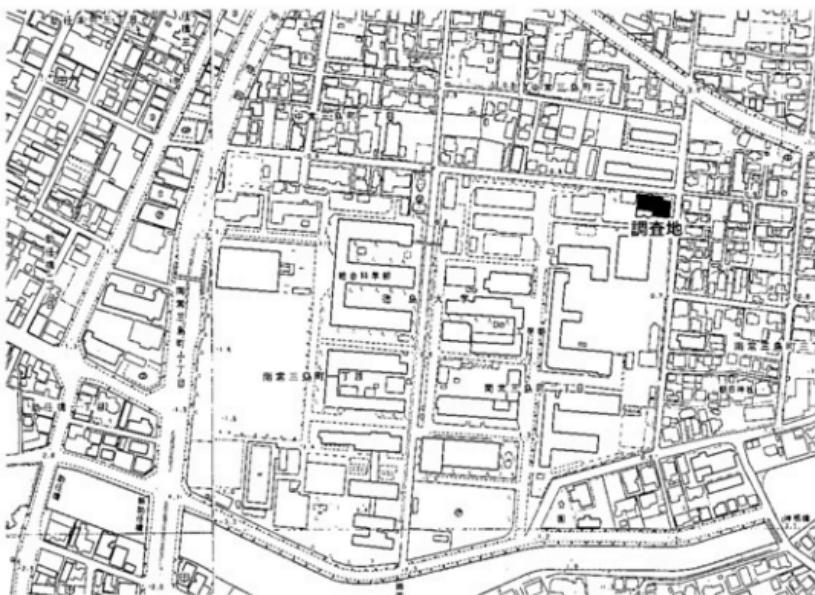
II 常三島遺跡（徳島大学工業会館建設工事）

1 調査に至る経緯と経過

常三島遺跡は徳島大学常三島キャンパス（工学部および総合科学部）を中心に、その周辺地域に広がる標高T.P.+1mを測る低位置に建設された江戸時代の武家屋敷跡である。

常三島遺跡は1993年の徳島大学埋蔵文化財調査室による工学部実習棟新築工事に伴う試掘調査により、考古学的立場から遺跡としての認識を得ている⁽¹⁾。以後、徳島大学キャンパス内では調査室による調査が継続的に実施されており、従来の歴史資料研究とは異なる数多くの情報から、江戸時代における社会復原に重要な成果を得ている⁽²⁾⁽³⁾。

寛永年間（1631–1636）の「忠英様御代御山下絵図」には、すでに常三島が武家屋敷として機能していることから、「徳島」「寺島」「出来島」などとともに、江戸時代の初期から整備された地域であることが窺える。また安政年間（1854–1860）の「御山下島分絵図・常三島」は縮尺1/1300の精巧な絵図とされ、絵図に見える道が現道とほぼ一致することから、江戸時代の町割が基本的に現在にまで引き継がれていることが判り、今回の調査地が根来家（根来島藏・一反廿五歩）の敷地の一角に位置することが読み取れる⁽⁴⁾（図版1）。



第1図 調査地位置図

調査は徳島大学工業会館建設に伴うものであり、調査地は徳島大学工学部構内の北東隅部に位置する（第1図）。建設主体である徳島大学工業会と協議の結果、試掘調査による遺跡の存在確認後、建物部を対象に調査を実施した。なお、調査は徳島大学工業会館建設地埋蔵文化財発掘調査会と徳島市教育委員会が実施した^①。

2 基本層序（第2図、図版2）

調査地周辺の標高は現地表面がT.P.+1.1mを測り、現代盛土層下（0層）に第1～3層（第2図・堆積土層図では第1層=1、第2層=39、第3層=40）が堆積する。以下、上位より概略する。

第1層：旧耕作土で1922年（大正11）徳島高等工業学校（現徳島大学工学部）建設以前の農業耕作土である。

第2層：褐色～淡黄色細～粗砂で層厚30cmを測り、屋敷設置に伴う盛土整地層である。

調査地における盛土は単層であるが、徳島大学工学部構内における他の調査事例では数次にわたる整地が行われている。

第3層：淡黄色～灰色細～粗砂で湧水層の地山である。

砂州状沖積地に形成された遺跡に起る特有現象としての噴砂痕跡が見られる（図版2）。

3 調査概要（第2図、図版3）

調査では第2層上面において、溝、土壤、建物跡、歴跡、石組遺構を検出している。

以下、主な遺構、遺物について概略する。

（1）溝

① 小溝群（第2図、図版3）

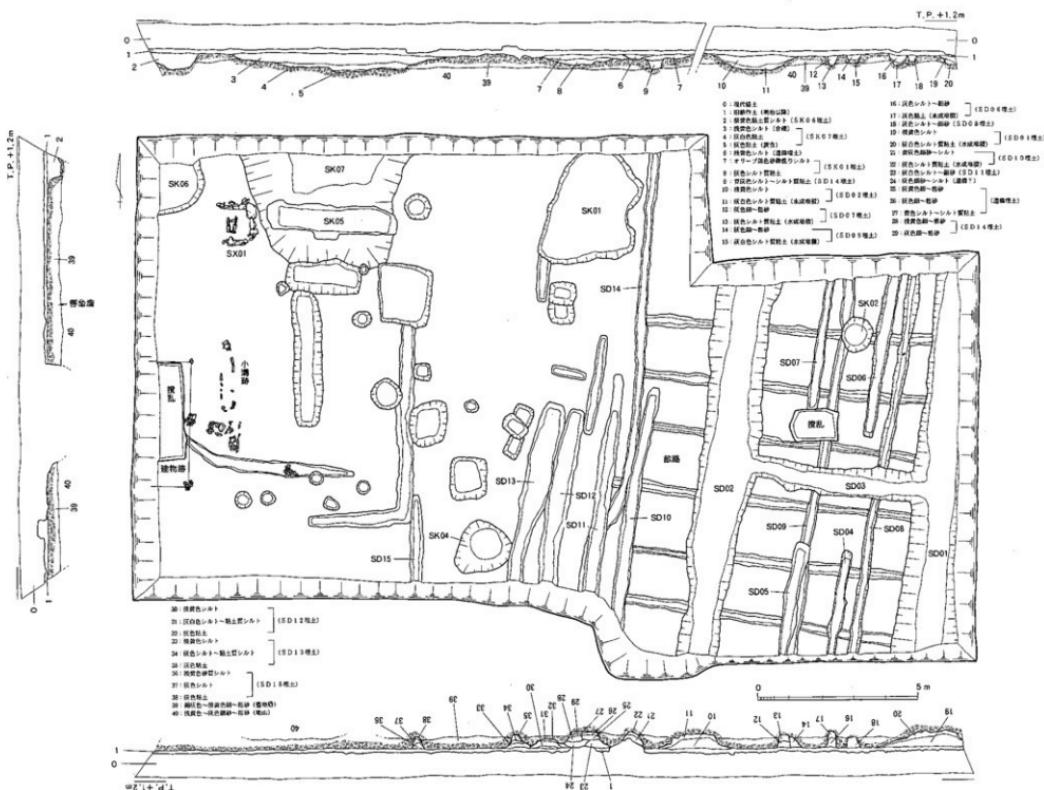
調査地東部において幅30～40cm、深さ10cmを測り、断面形がレンズ状を呈し、1.5m等間で並ぶ東西方向の小溝を6条検出している。屋敷地内における畠畝の痕跡であると考えられる。

② 溝SD01（第2～5図、図版3～6、17、18、36）

調査地内での最大幅2m、深さ50cmを測る南北方向の溝である。埋土は淡黄色シルト（上層）と灰白色粘土質シルト（下層）である。下層は水成堆積であることから、当時の溝は淤泥状態であったものと考えられる。溝には陶器器、瓦、石が多量に投棄されている。

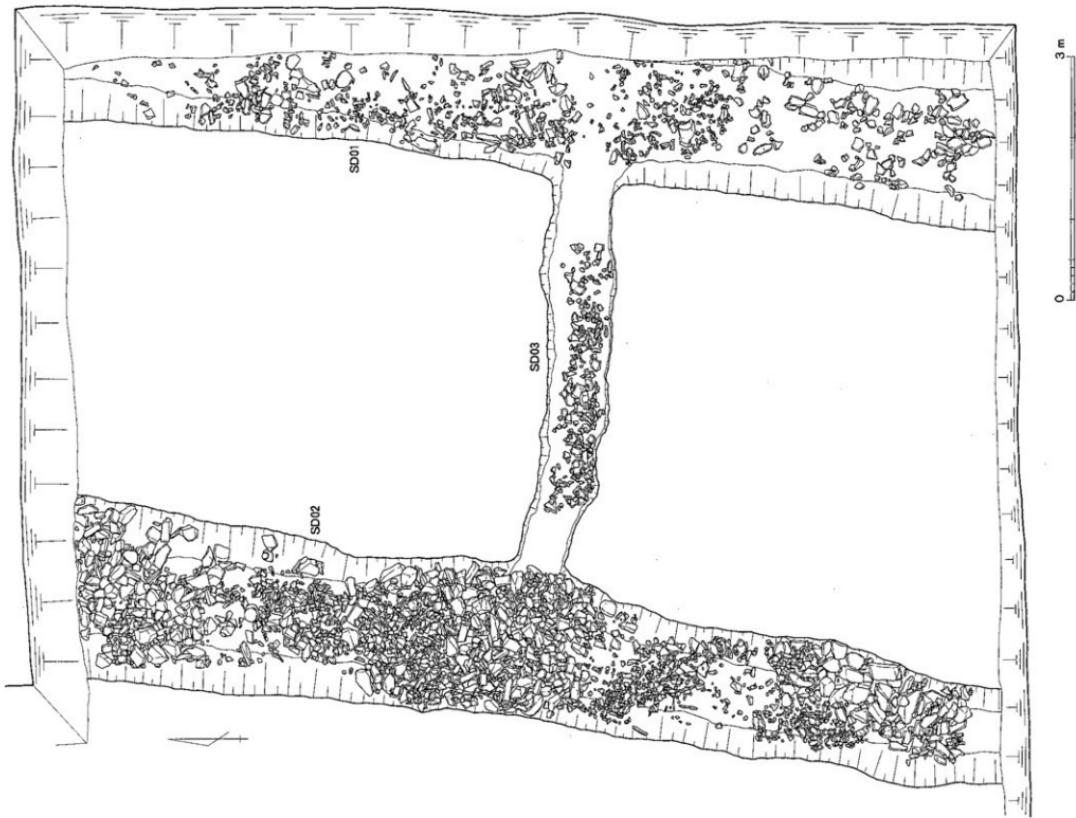
出土遺物には染付皿（1）、染付紅皿（2）、染付端反碗（3～6）、染付丸碗（7）、土師質皿（8）、灰釉灯明受皿（9）、染付小杯（10）、蓋（11、14、15）、染付蓋（12、13）、染付仏飯器（16、17）、徳利（18～20）、擂鉢（21、22）、下駄（図版36～23）がある。

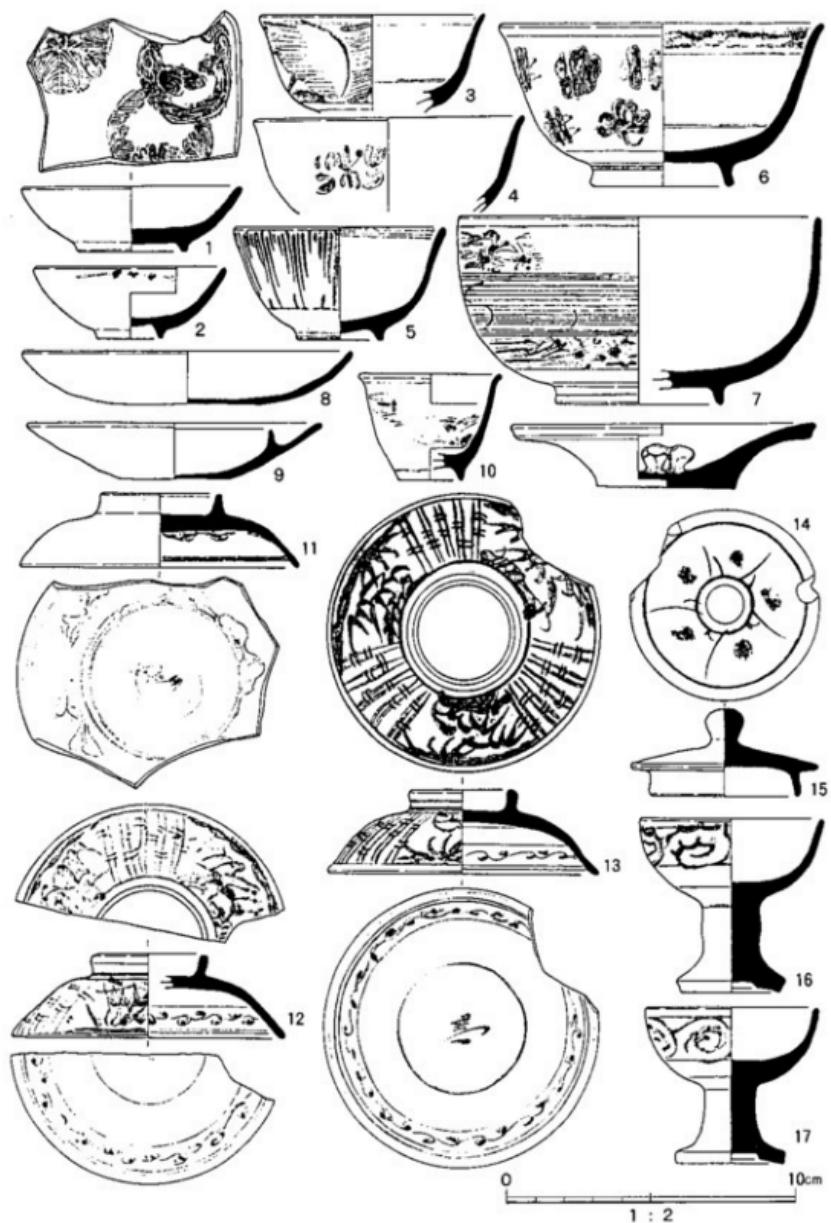
碗（4、6）、受皿（9）、蓋（15）は瀬戸美濃系である。染付仏飯器（16、17）には蛸唐草文が描かれる。徳利（18）は大谷焼、徳利（20）は唐津系？であろうか。擂鉢（21、22）は堺系である。



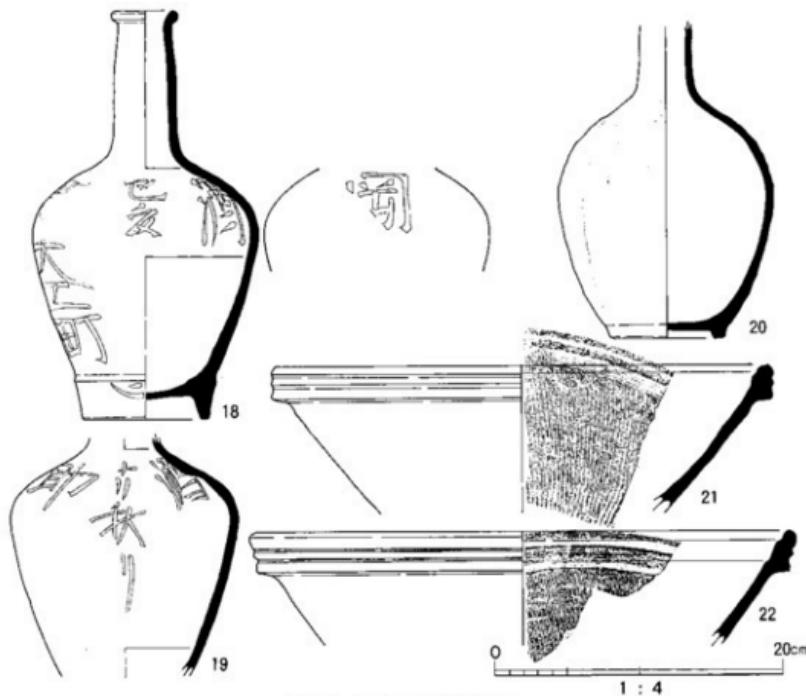
第2図 造構配図・断面堆積土層図

第3圖 清S D01~03 週物搬出状況図





第4図 濱SD01出土遺物



第5図 溝SD01出土遺物

③ 溝SD02（第2、3、6～9、図版3～5、7、19～27、36）

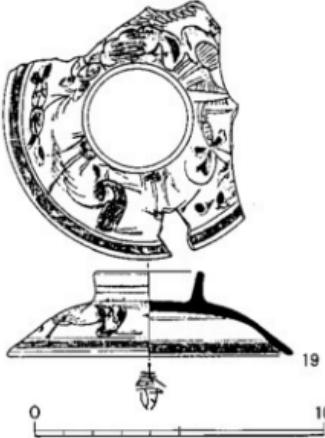
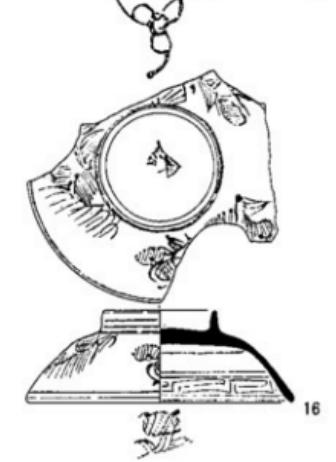
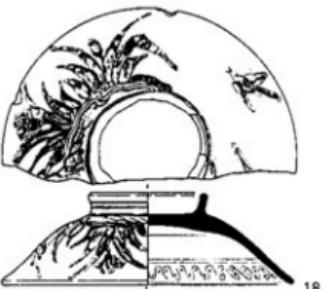
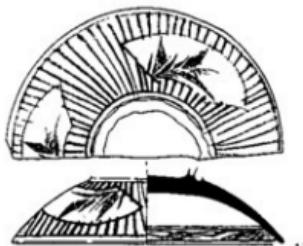
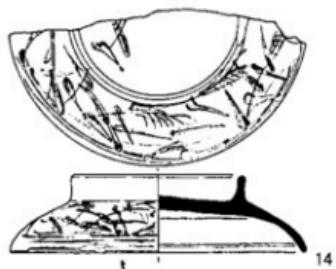
幅1.5～1.9m、深さ50cmを測り、断面形がレンズ状を呈する南北方向の溝である。埋土はSD01と同様であり、下層は水成堆積によるシルト質粘土が見られる。

出土遺物には染付端反碗（1～5、11）、白磁碗（7）、染付丸碗（6、12）、染付湯飲み碗（8）、碗（9、10）、青磁碗（13）、染付蓋（14～19）、灰釉蓋（20）、蓋（21）、柿釉蓋（22、23）、珉平皿（24）、灰釉灯明受皿（25、26）、灰釉灯明皿（27）、小壺（28）、染付仏飯器（29）、色絵仏飯器（30）、角鉢（31）、染付皿（32、33）、灰釉捏鉢（34）、灰釉土瓶（35、36）、徳利（37、38）、水差し（39）、植木鉢（40）、うのふ釉火鉢（41）、土人形（42、動物）、硯（43）、土師質鍋（44）、擂鉢（45～55）、下駄（図版36～56）がある。

碗（9）は萩系、碗（10）は唐津系？、碗（7）は紅皿として使用した可能性が考えられる。蓋（20）、受皿（25、26）、皿（27）、捏鉢（34）、土瓶（35、36）、火鉢（41）は瀬戸美濃系である。小壺（28）は備前系の地鎮具であると考えられる。徳利（37、38）、水差し（39）、擂鉢（46）は大谷焼である。擂鉢（47～54）は撋系であると考えられ、（45、55）は見込みに放射パターンの撋目が見られる。³⁰

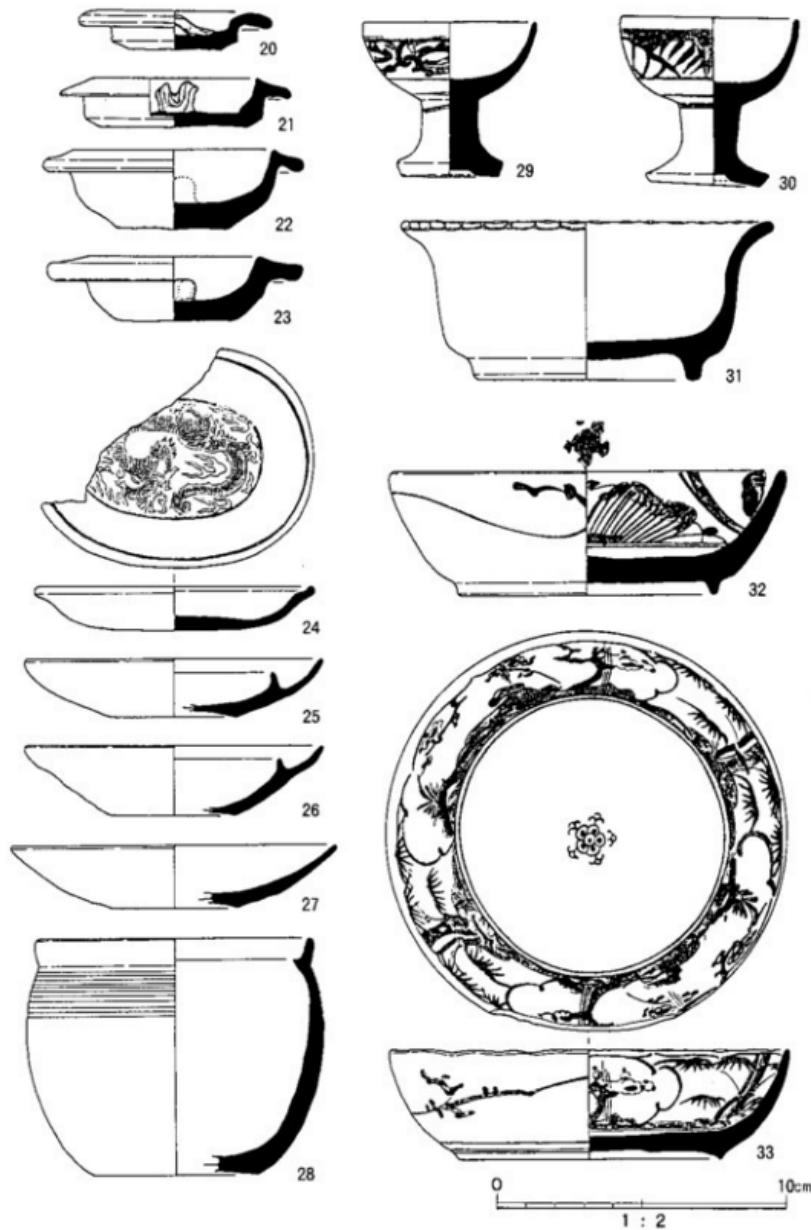


第6図 溝SDO 2出土遺物

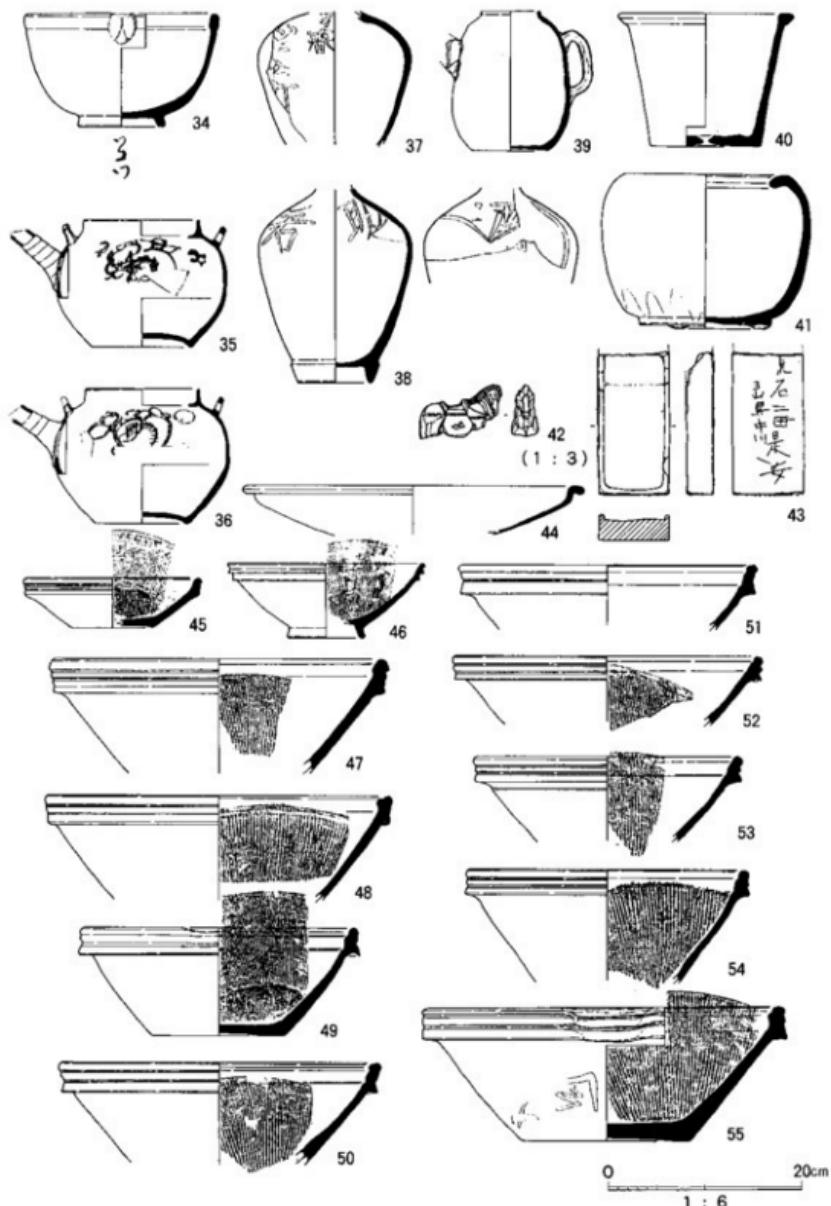


0 10cm
1 : 2

第7図 溝S D02出土遺物



第8図 溝SDO 2出土遺物



第9図 満S D 0 2出土遺物

④ 溝 S D 0 3 (第 2, 3, 12 図, 図版 3, 4, 28, 29, 37)

幅 70cm ~ 1m, 深さ 50cm を測り, 断面形が逆台形を呈し, 溝 SD01 と 02 を繋ぐ東西方向の溝である。出土遺物には染付皿(1), 色絵染皿(2), 小碗(4), 染付端反碗(5, 6), 貼付文糸目徳利(8, 布袋徳利), 灯明皿(9), 灰釉灯明皿(10), 土人形(3, 人), 下駄(図版 37-19, 20)がある。

皿(2)の底部外面には「富貴長春」銘がある。碗(4)は信楽系, 徳利(8), 皿(9)は備前系, 皿(10)は瀬戸美濃系である。

⑤ 溝 S D 0 4 ~ 0 7 (第 2, 12 図, 図版 3, 29, 30)

幅 30 ~ 50cm, 深さ 40 ~ 50cm を測り, 断面形が U 字状を呈する南北方向の収束する溝である。

SD04 と 05, SD06 と 07 がそれぞれ対応並走し, SD03 を境界にするかのように収束する。

SD04 出土遺物には杯形台付受皿の受皿部(12), 染付蛸唐草文徳利(17), SD05 出土遺物には灰釉灯明皿(13), 染付湯飲み碗(15)がある。受皿(12)は大谷焼である。

⑥ 溝 S D 0 8 ~ 0 9 (第 2, 12 図, 図版 3)

幅 30cm, 深さ 30 ~ 40cm を測り, 断面形が逆台形を呈する南北方向の溝であり対応並走する。

⑦ 溝 S D 1 0 ~ 1 1 (第 2, 12 図, 図版 3, 29)

幅 50cm, 深さ 30cm を測り, 断面形が U 字状を呈する南北方向の溝であり対応並走し収束する。

SD10 出土遺物に灰釉灯明受皿(11)がある。皿(11)は瀬戸美濃系である。

⑧ 溝 S D 1 2 ~ 1 3 (第 2, 11 図, 図版 3, 8, 9, 29, 30)

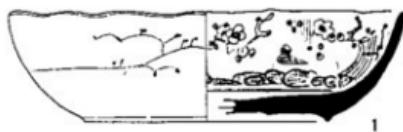
溝 SD12 は幅 60 ~ 70cm, 深さ 30cm を測り, 断面形が皿状を呈し, また SD13 は幅 50 ~ 80cm, 深さ 40cm を測り, 断面形が深い皿状を呈する。いずれも収束する南北方向の溝である。

SD12 出土遺物には染付蓋(7), 小壺(16), 杯形台(灯明用 18), SD13 出土遺物には蓋(14)がある。

台(18)は大谷焼, 壺(16), 蓋(14)は備前系であり, 共に地鎮具と考えられる。



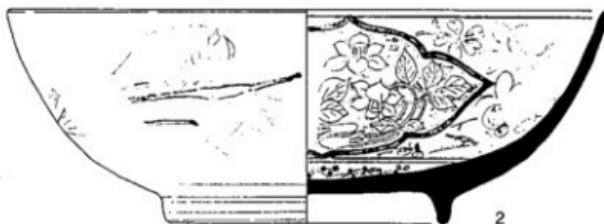
第 10 図 溝 S D 1 2, 1 3 遺物検出状況図



1



1



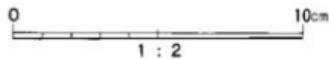
2

1

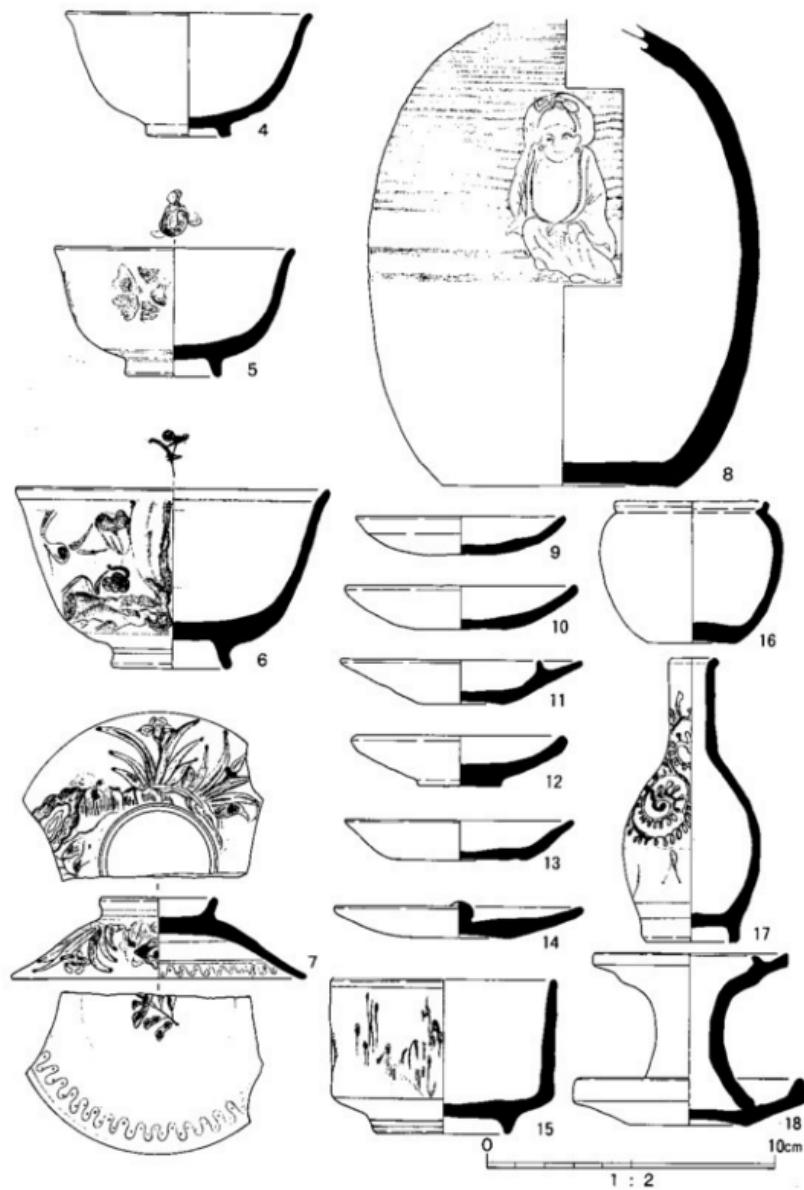
富
長
赤
賞



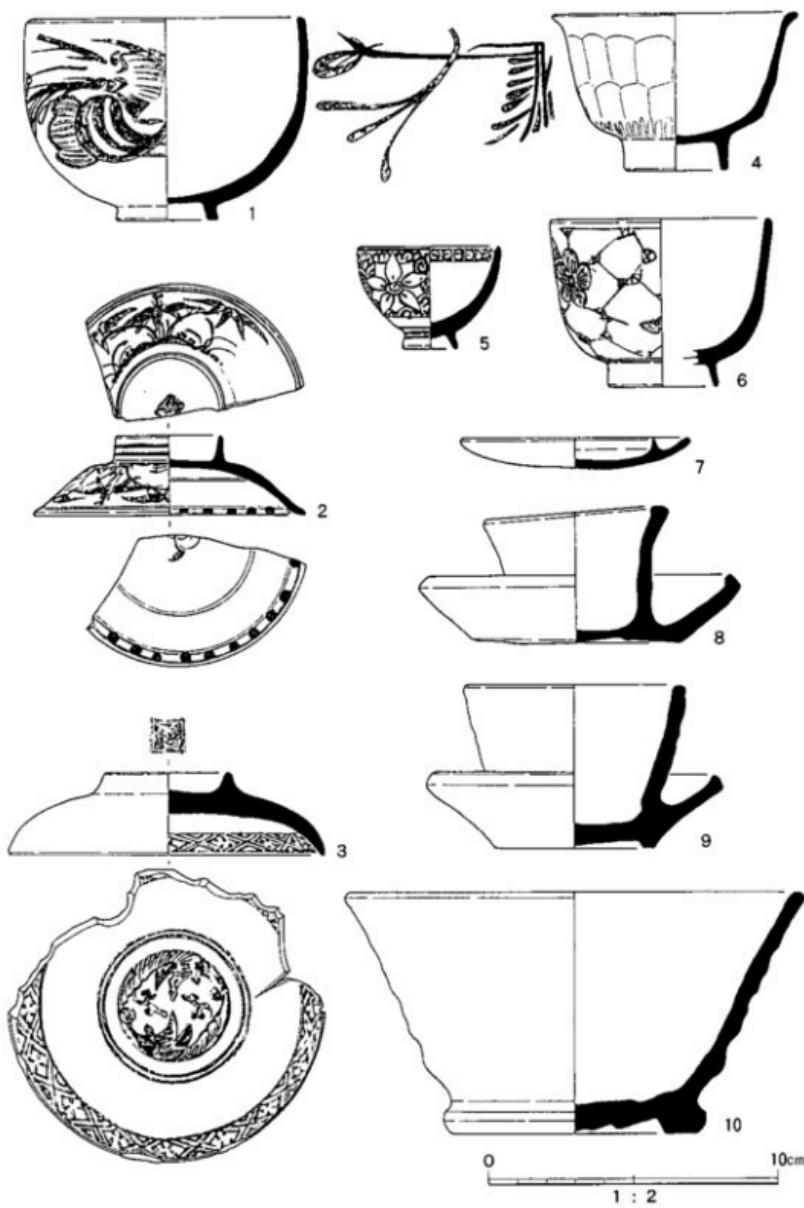
3



第11図 溝S D 0 3 (1, 2), SD13(3)出土遺物



第12図 潟SD03 (4~6, 8~10), SD04 (12, 17), SD05 (13, 15),
SD10 (11), SD12 (7, 16, 18), SD13 (14) 出土遺物



第13図 溝SD14出土遺物

⑨ 溝 S D 1 4 (第 2, 13図, 図版 3, 10, 11, 30, 31)

幅30~40cm, 深さ30cmを測り, 断面形がU字状を呈する南北方向の溝であるが, 一部緩やかにクランクする。溝SD10とSD11と重複して位置し, SD10とSD11の前進的な機能を所有していた可能性が考えられる。

出土遺物には注連縄文碗(1), 染付蓋(2), 青磁染付蓋(3), 碗(4, 6), 猪口(5), 灯明受皿(7), 坏形台(8, 9灯明用), 鉢(10)がある。

碗(1)には注連縄と海老が描かれる。

碗(4)は信楽系, 台(8, 9), 鉢(10)は瀬戸美濃系, 皿(7)は備前系である。

(ii) 土 壤

① 土壤 S K 0 1 (第 2, 14~16,

図版 3, 12, 32, 33, 37)

長辺3.7m, 短辺2.7mの平面形が不整長方形を呈し, 深さ20~30cmを測る土壤である。

出土遺物には壺(1), 鉄軸斐(2), 柿釉土瓶(3), 摺鉢(4), 染付端反碗(5~8), 白磁碗(9), 染付小杯(10), 染付蓋(11, 12), 染付猪口(13), 碗(14, 15), 染付皿(16, 17), 下



第14図 土壤 SK 0 1 遺物検出状況図



第15図 土壤 SK 0 1 出土遺物



第16図 土塼SKO1出土遺物

駄(図版37-18)がある。

(9, 10)は紅皿として使用した可能性もある。甕(2)は瀬戸美濃系、描鉢(4)は堺系、碗(14, 15)は萩系である。

② 土壙SK02 (第2, 17図, 図版3, 34)

径1mの平面形が円形を呈し、深さ30cmを測る土壙である。

出土遺物には染付端反碗(1)が出土している。碗(1)は瀬戸美濃系である。

③ 土壙SK03 (第2, 17図, 図版3, 34)

径50cmの平面形が円形を呈し、深さ10cmを測る集石土壙である。

出土遺物には染付広東碗(2)が出土している。

④ 土壙SK04 (第2, 17図, 図版3, 34)

長径1.8m、短径1.6mの平面形が不整円形を呈し、深さ60cmを測る土壙である。

出土遺物には鉄軋鍋(3)が出土している。

⑤ 土壙SK05 (第2, 17図, 図版3, 13, 34, 35)

長辺4m、短辺80cmの平面形が長方形を呈し、深さ30cmを測る土壙である。

出土遺物には土師質小杯(4), 染付小杯(5), 土師質皿(6~8), 染付碗(9~11), 碗(12, 13), 焙烙(14)がある。

皿(6~7)の底部外面には回転糸切痕が見られる。碗(12)は瀬戸美濃系、碗(13)は京焼系であると考えられる。

(iii) 建物跡 (第2, 18図, 図版3, 13)

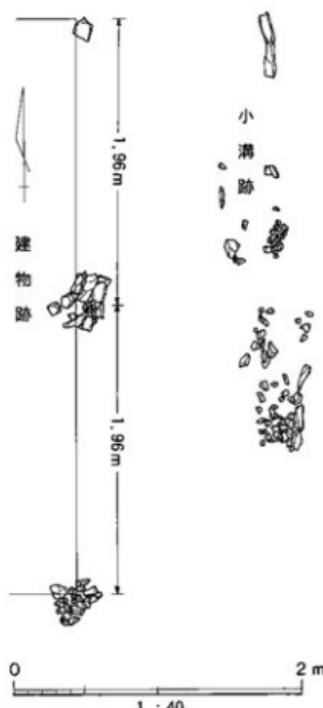
東側梁行2間分を検出している。小蹠の集積箇所が見られ、本来は礎石建物であると考えられるが、礎石は除去されているものと考えられる。柱間寸法は1.96m等間である。

また建物梁行に並行して石列の小溝があり、雨落溝の可能性が考えられる。

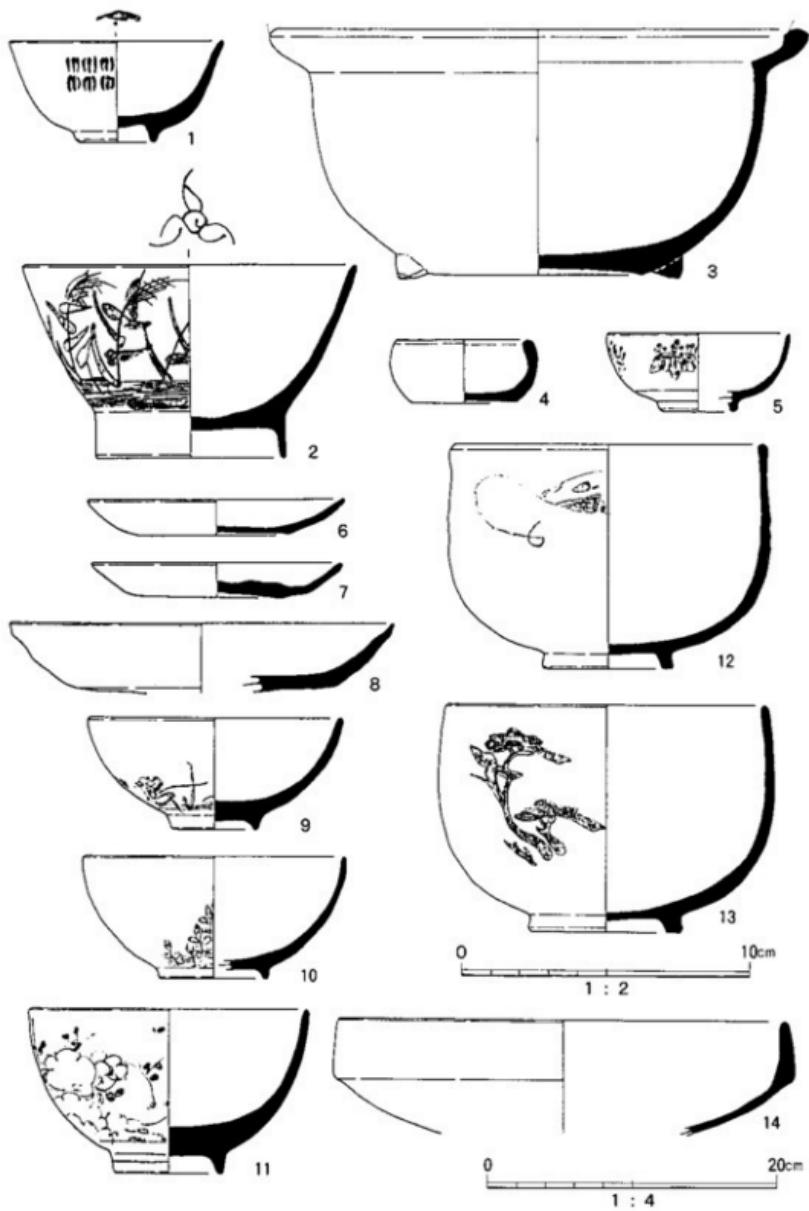
(iv) 石組遺構SX01 (第2, 19図, 図版3, 14~16)

コの字状に三方を石列で囲んだ中央部に、長辺50cm、短辺30cmの平面形が長方形を呈するように瓦を立て組み合わせている。

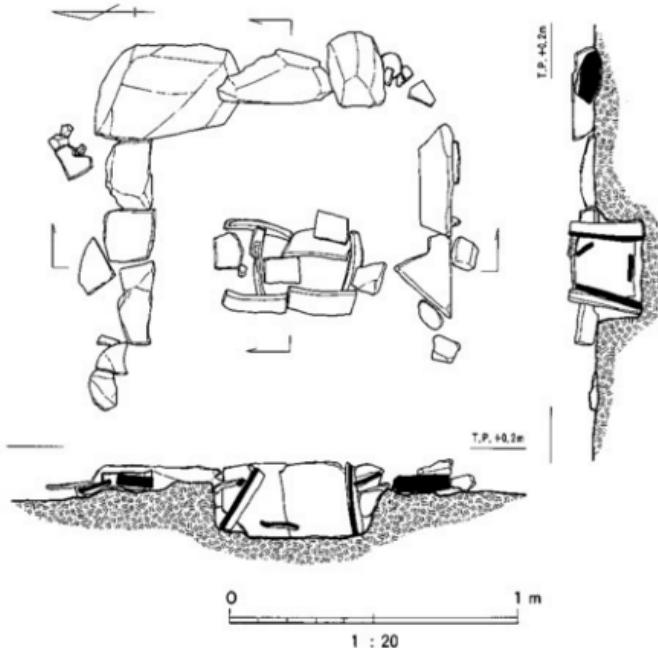
長辺部の一辺には平瓦2枚、短辺部には軒平瓦1枚をそれぞれ使用している。使用用途については不明である。



第17図 建物跡および小溝検出状況図



第18図 土壌SK02(1), SK03(2), SK04(3), SK05(4~14)出土遺物



第19図 石組遺構 S X 0 1

3 小 結

調査地の東部において検出された小溝群は島畠跡と考えられ、屋敷内における菜園空間を示す痕跡であろう。ところが後にこの「場」が放棄され、数条の溝が掘削される。

まず溝SD08と09は幅が30cm程度の小規模な溝であり、しかも並行することから溝間において存在が想定される何らかの境界物に伴う雨落溝的なものとも考えられる。その後幅2mを測る規模の並行する溝SD01と02またこれらを繋ぐ溝SD03が設置される。

溝SD04～07はいずれも収束する溝であり、SD04と05、06と07がそれぞれセットになるものと考えられる。溝SD03により分断するもののSD08・09と同様に雨落溝的なものが考えられる。

近年、徳島大学構内における常三島遺跡の発掘調査の成果から、このような屋敷地の周囲を巡る溝については「地界溝」の可能性が考えられている。おそらく今回の調査で検出されたこれらの溝の機能についても、一つには屋敷地を区画する地界溝や境界物に伴う雨落溝的なもの、もう一つに常三島遺跡が標高T.P.+1m前後の低湿地上に立地する性格上、排水対策をも兼ね備えていたとも考えられる。

調査地に存在した根来島藏氏の屋敷は、調査地北側の道に開口を持つ建物であると絵図から想定される。調査では建物跡の東側梁行2間分を検出し建物は調査地外へ広がる。絵図に描かれた武家屋敷より、当時の柱間隔（一間）は6尺5寸と考えられており^⑦、検出された建物跡の柱間隔（1.96m）はその数値に一致する。根来島藏の石高は八石程度であり、下級武士層の屋敷ではあるが、建物の基本構造は武家屋敷においては統一されていたものと見られる。ただ屋敷地の総面積（一反廿五歩）に対して建物の占める面積割合は非常に低いものと考えられる^⑧。

出土遺物には肥前系、瀬戸美濃系、萩系、京焼系、備前系、堺系、明石系、大谷焼の陶磁器類が見られ、中でも瀬戸美濃系の存在が目立ち、当時の商品流通システムおよびその社会的背景を考える上で、特徴的な事象であるかもしれない。

今回検出された遺構については、19世紀後半の幕末～明治初期頃の状況を示すものである。17世紀前半に吉野川下流域の低位帯に新興地として建設された武家屋敷「常三島」は約300年後の明治時代には人々の流出により屋敷は取り壊され、町は廃墟と化したような状況となる。

註

- (1) 徳島大学埋蔵文化財調査委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室「地域共同研究センター棟新営地（常三島遺跡）埋蔵文化財発掘調査概要報告書」1994年。
- (2) 徳島大学埋蔵文化財調査委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室「徳島市常三島遺跡95年度発掘調査現地説明会資料」1995年。
- (3) 徳島大学埋蔵文化財調査委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室「徳島市常三島遺跡96年度発掘調査現地説明会資料」1996年。
- (4) 徳島市立徳島城博物館「企画展・城下町徳島」パンフレット、1993年。
- (5) 徳島市教育委員会「第17回埋蔵文化財資料展－阿波を掘る－」図録、1997年。
- (6) 堀内英樹「『備前系焼締め插鉢』の系譜」、東京考古10、1992年。
- (7) 賀島右兵衛屋敷図（寛政9年）による。
- (8) 建坪率の低さについては北條芳隆氏の指摘がある。

写 真 図 版

I 名東遺跡（名東西都市下水路建設工事）



堅穴住居 SA 01, 02 検出状況

北より



B 区遺構検出状況（部分調査時）

北より



土壤SKO1遺物出土状況

南東より



土壤SKO2遺物出土状況

南東より



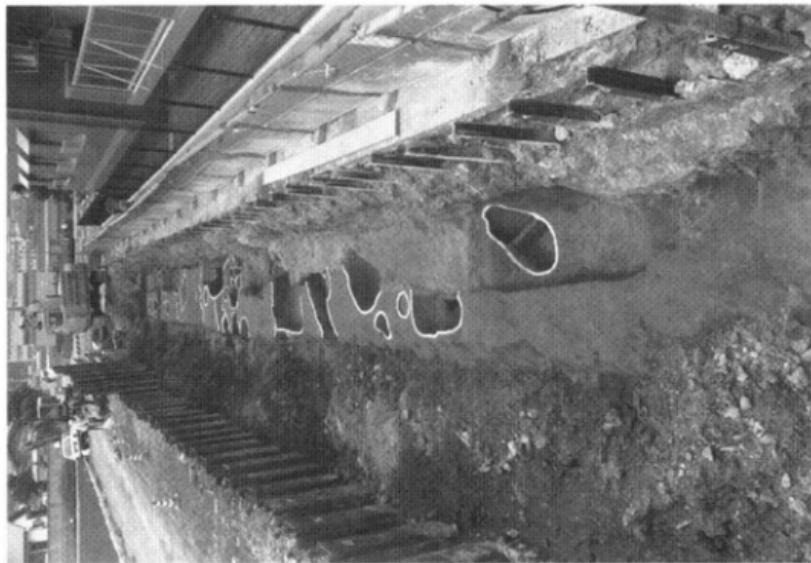
溝 S D O 4 遺物出土状況

西より



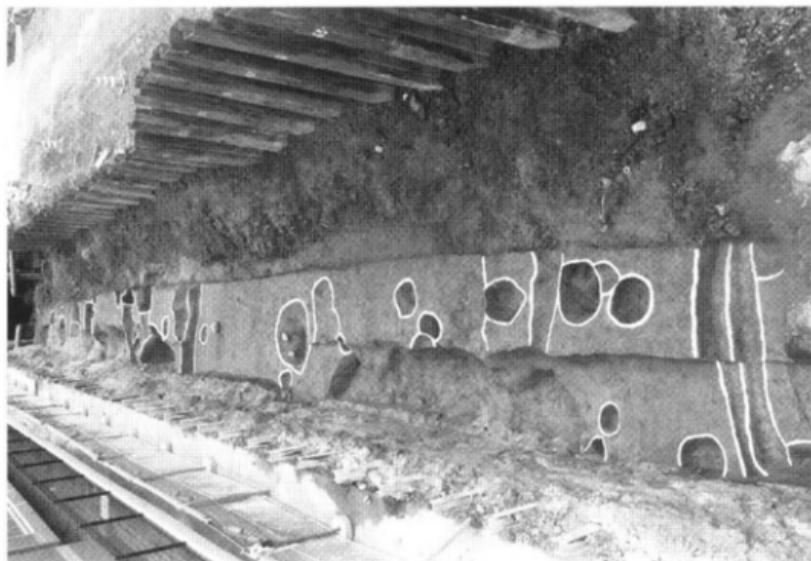
土壤 SKO 3 確認状況

東より



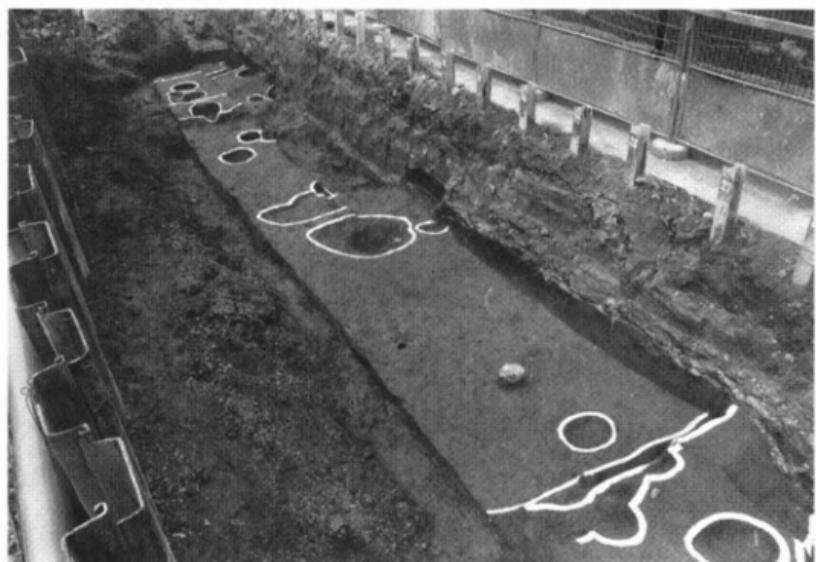
口凶無驚驚狀然

七九〇



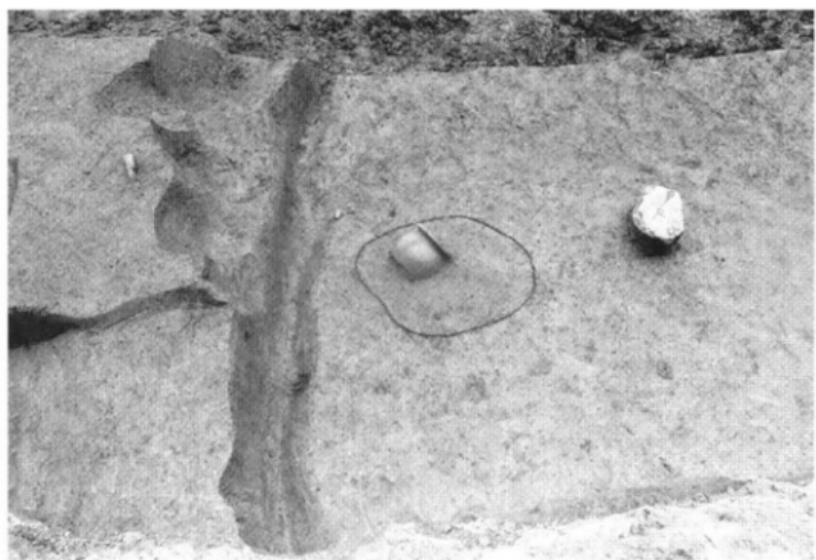
口凶無驚驚狀然

七九〇



竪穴住居跡 S A 0 3 検出状況

北より



竪穴住居跡 S A 0 3 隅 (40) 出土状況

西より



竪穴住居跡 SA 03 壺 (43), 鉢 (44, 46) 出土状況

東より



竪穴住居跡 SA 03 SP 05 断ち割り状況

西より



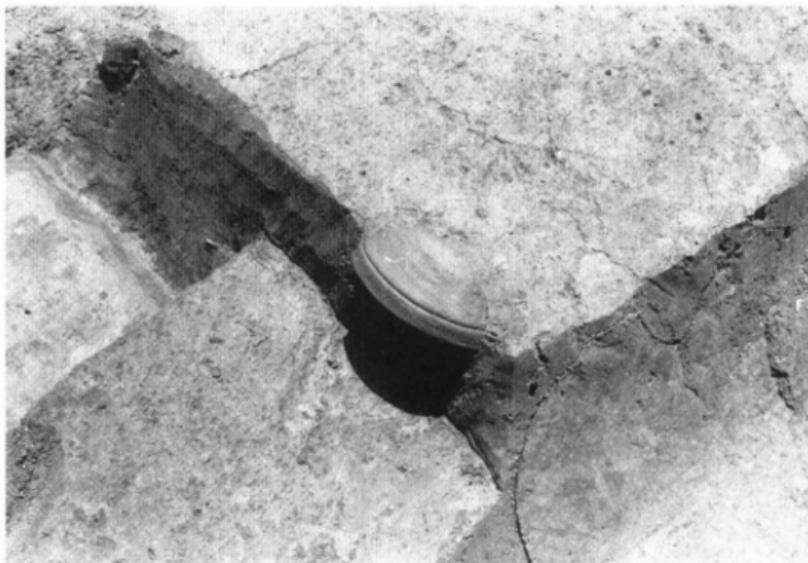
E区遺構検出状況

北より



整穴住居跡 S A O 5 (E区) 検出状況

北より



豊穴住居跡 SA 05 高环 (60) 出土状況

北西より



E 区遺構検出状況

南より



土壤SK06, 07検出状況

東より



溝SD102, 103検出状況

北東より



F区北半部溝S D 105, 106検出状況

北より



F区北半部溝S D 105, 106検出状況

北より



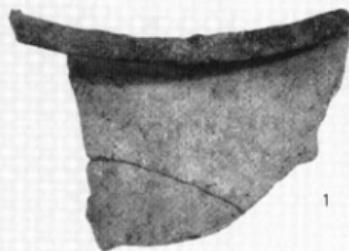
F区南半部溝S D 105, 106検出状況

南より



土壤SK 08壺(78)検出状況

南より



整穴住居跡 S A 0 2 出土遺物

(縮尺不同)



4



5



6



7

溝 S D O 1 出土遺物

(縮尺不同)

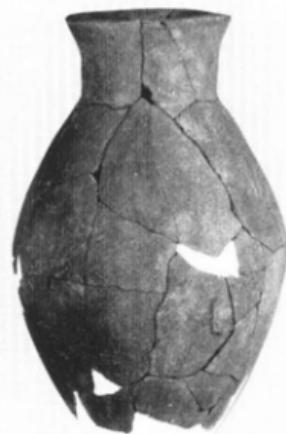
圖版
14



8



10



15



16



17

溝 S D O 4 出土遺物

(縮尺不同)



18



20



21

土壤 SKO 1 出土遗物

(缩尺不同)



22



29



24



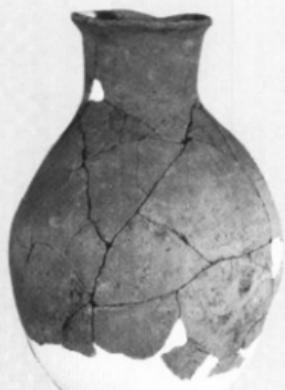
25



26



31



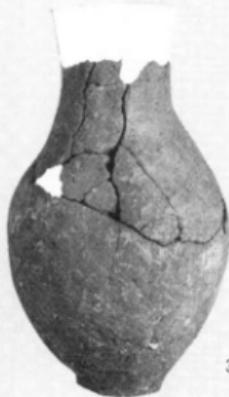
32



33



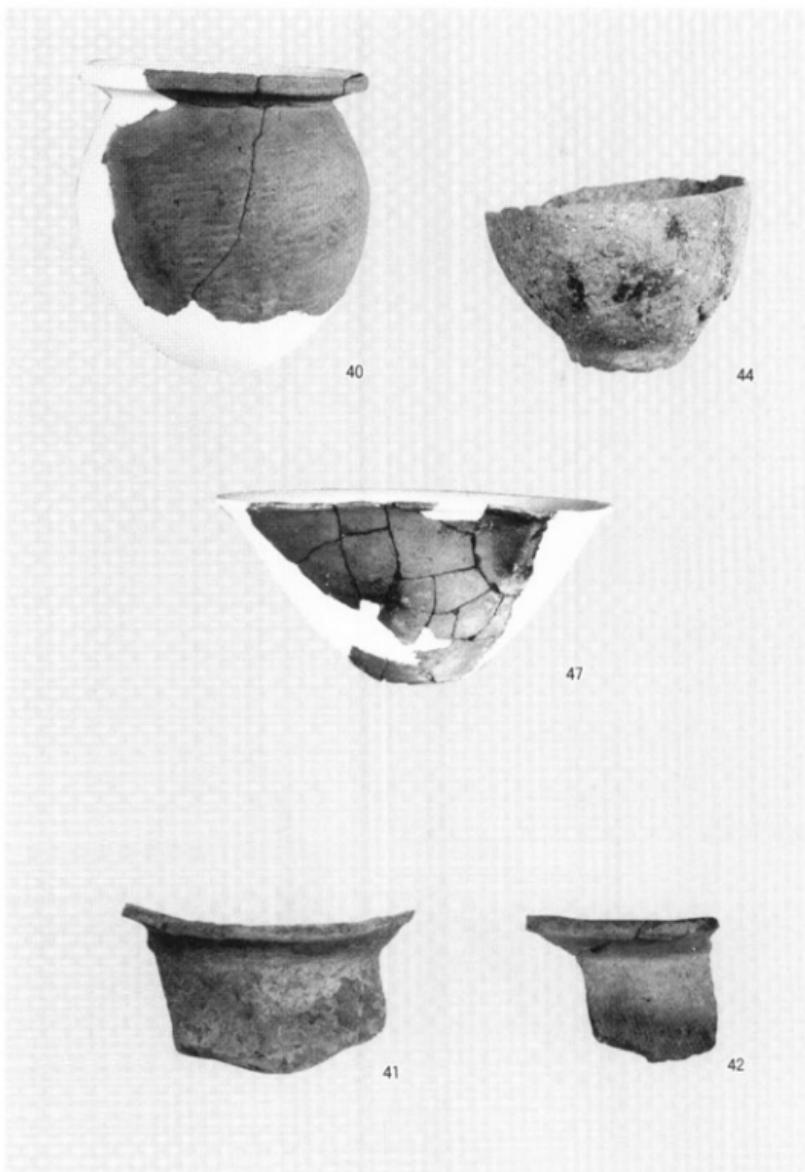
39



37

土壤SKO3出土遺物

(縮尺不同)



竪穴住居跡 S A O 3 出土遺物

(縮尺不同)



52



53



59

整穴住居跡 S A 0 4 (52), S A 0 5 (53, 59) 出土遺物

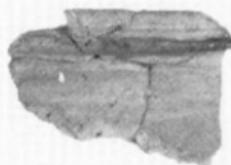
(縮尺不同)



62



61



-



64



63





65



70



71



67



68

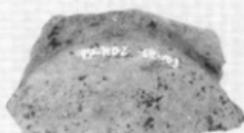
溝SD05(65), 土壠SK05(70, 71), SK06(67, 68)出土遺物 (縮尺不同)



72



73



74



75



76



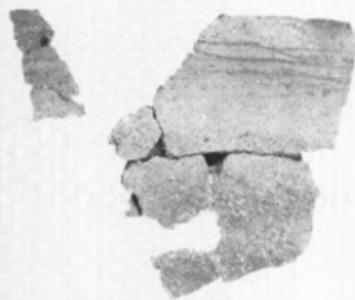
77

溝 S D102 (72), S D103 (73), S D104 (74~77) 出土遺物

(縮尺不同)



78



79

土壤SKO8(78),溝SD106(79)出土遺物

(縮尺不同)

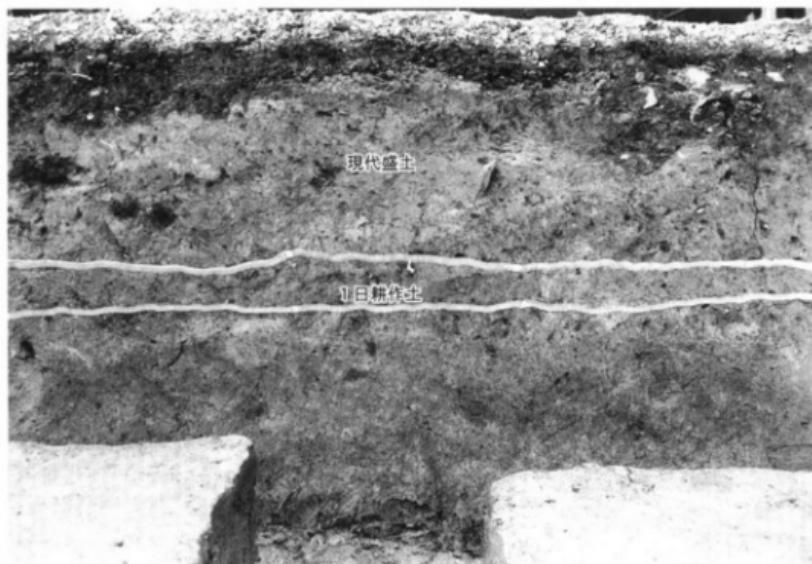
写 真 図 版

II 常三島遺跡（徳島大学工業会館建設工事）



御山下島分絵図 常三島 (★: 根来島藏)

個人蔵



調査地堆積状況

東より

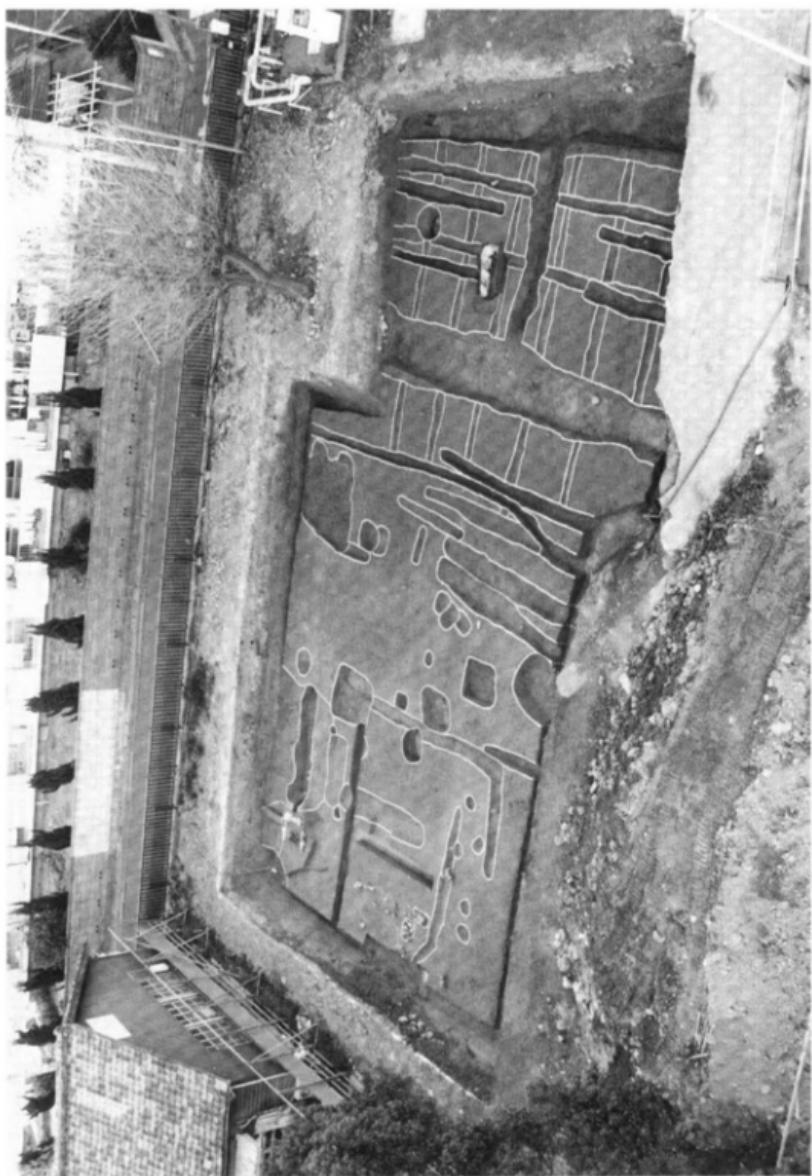


噴砂現象

東より

南東より

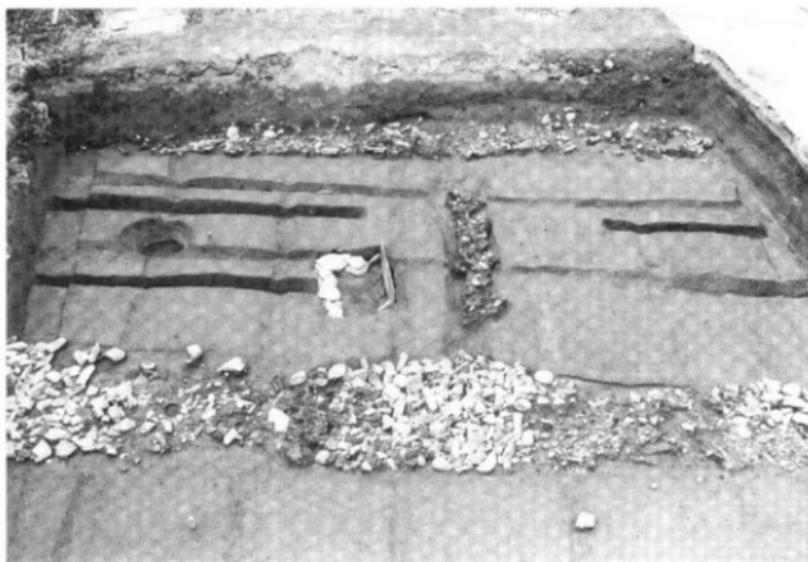
調査地全景





溝S D 0 1～0 3 遺物検出状況

南より



溝S D 0 1～0 3 遺物検出状況

西より



溝S D 0 1 遺物検出状況

南より



溝S D 0 2 遺物検出状況

南より



溝 S D O 1 遺物検出状況

西より



溝 S D O 1 遺物検出状況

北より



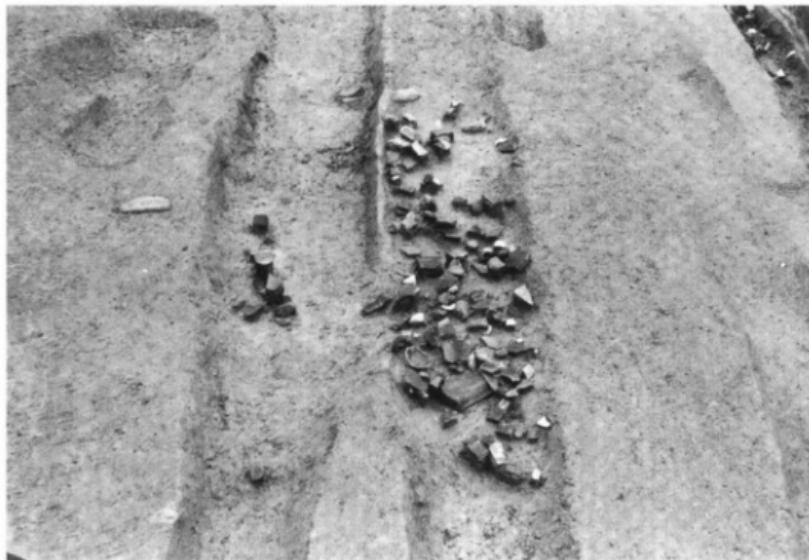
溝 S D O 2 遺物検出状況

南より



溝 S D O 2 遺物検出状況

南東より



溝 S D 12, 13 遺物検出状況

南より



溝 S D 12 遺物検出状況

北東より



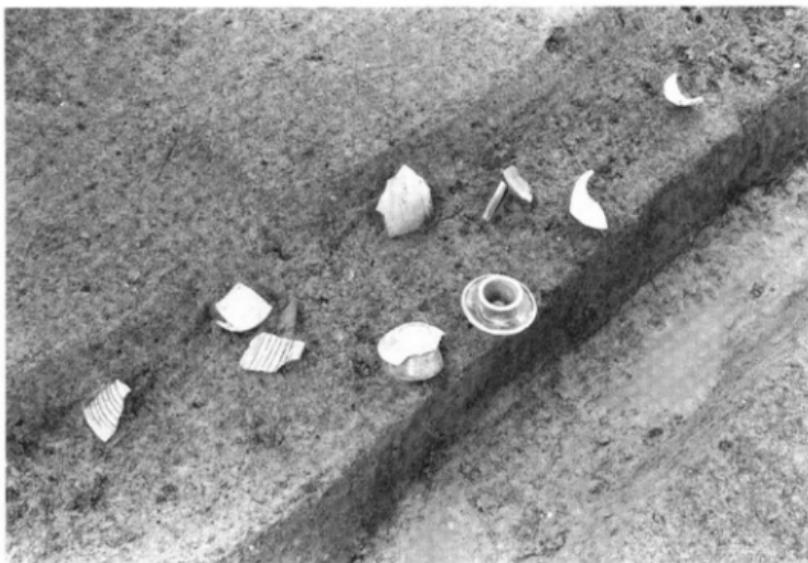
溝 S D 1 3 遺物検出状況

南より



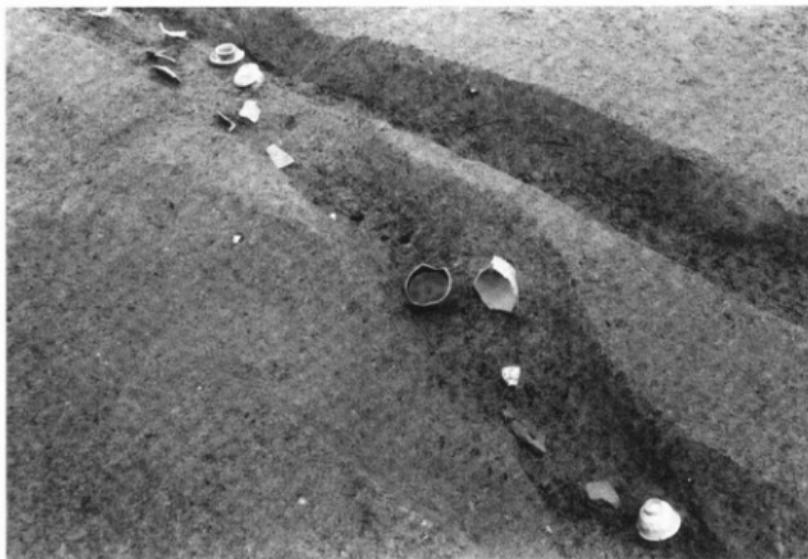
溝 S D 1 3 遺物検出状況

南より



溝 S D 1 4 遺物検出状況

南東より



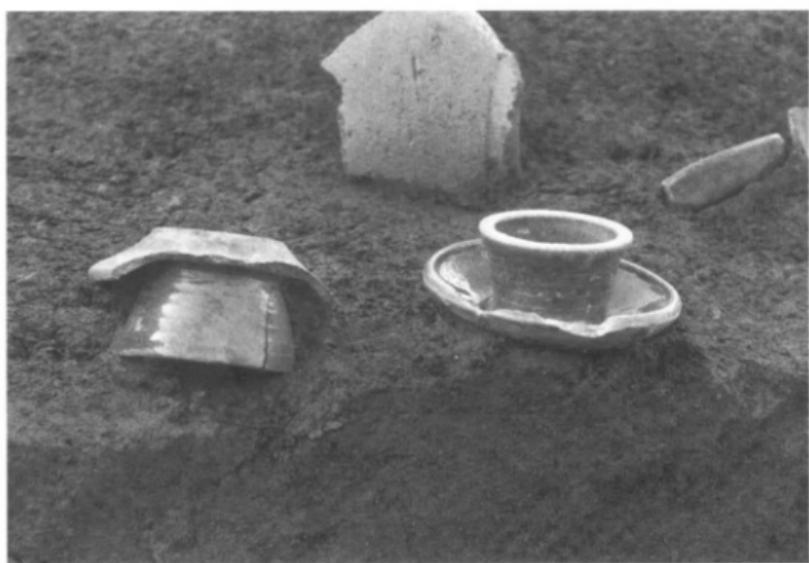
溝 S D 1 4 遺物検出状況

南西より



溝 S D 1 4 遺物検出状況

南より



溝 S D 1 4 遺物検出状況

東より



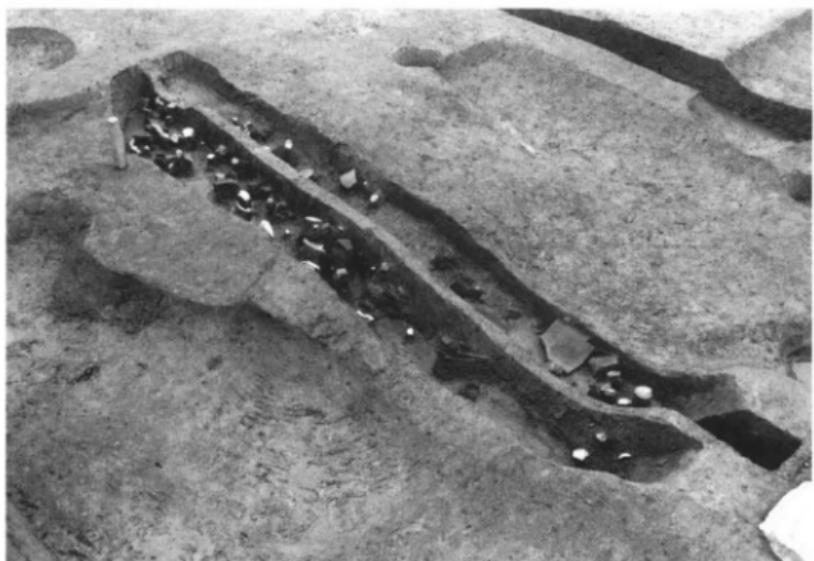
土壤SK01遺物検出状況

東より



土壤SK01遺物検出状況

東より



土壤SKO5遺物検出状況

北西より



建物跡と小溝跡

北より